

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成十八年八月三十一日發行

國語國字

第百八十六號

目次

第七十七回講演會

翻譯あれこれ	中村 保男	1
小學生に歴史的假名遣を教へて	中澤 伸弘	14
これからの假名遣戰略を考へる	高崎 一郎	23
特別寄稿		
言葉の雜學(六)	鹽原 經史	33
『國語問題論爭史』の出版に際して	土屋 道雄	37
會員寄稿		
「横たふ」をめぐつて	齋藤 恭一	43
聖書に於ける國語問題(その四)―ヘボンの言語觀―	松岡 隆範	45
國語問題協議會に入會して	大谷眞智子	48
和歌應募作		
國語かなづかひ講習會		
五十音圖とかなづかひ	上村 知己	53
書評		
『ほんとうの敬語』 萩野貞樹著	遠藤 浩一	59
『國語の底力』 鹽原經史著	谷田貝常夫	60
報告・その他		
第七回假名遣腕試し (問題と解答)	市川 浩	61
寄附者名簿十七年度		
編輯後記		
題字		
谷田貝常夫		
近藤 祐康		

翻譯あれこれ

中村保男

この講演の題名としては「翻譯アラカルト」なぞと付けてみたのですが、「アラカルト」といふのは片假名英語で、私は片假名英語は講演ではなるだけ使はない主義で、書くにしても鈎括弧で挟むことにしてゐます。講演で括弧を言ひ表すのは難しいので、「アラカルト」は止めて、「翻譯あれこれ」としてみました。

まづ初めに「翻譯者」といふ日本語を考へてみると、英語のトランスレイター (translator) といふ單語の譯語として翻譯すると、もう一つ別の日本語がある。それは翻譯家です。翻譯者とは違つて、翻譯家は職業として翻譯をしてゐる者、或いは社會的地位としての翻譯家であり、翻譯者はある作品を翻譯した人。翻譯家として有名でなくても一冊でも翻譯をすれば、その人は翻譯者であるといふことになります。さういふ區別が日本語では出来る。藝者と女の藝人とはどう違ふかと訊かれても困るんですが、さういふ風に藝のこまかい區分け方が出来る例の一つが翻譯家、

翻譯者です。

私はこの作品の翻譯家である、とは言へません。私はこの作品の翻譯者である、といふことです。類似の例を挙げればドライヴァーもさうで、運轉手と運轉者。運轉手は職業的運轉手。毎日バスを運轉してゐる人、タクシーを運轉してゐる人または運轉が職業となつてゐる者。運轉者となると、マイカーを運轉してゐる人、あるいは運轉してゐる状態そのものを指します。ダイヴァーも、潜水夫、潜水者と二つに分けられるのではないかと思ひます。潜水夫は、昔だと、あの分厚い宇宙服のやうな潜水服を着て、海面上から送られる空気を吸つて水中で作業をした人、それにたいして潜水者の方には遊びで潜る人も入ります。いはゆるウエット・スーツにくるまつたダイヴァーです。さういふ風に潜水夫または潜水員と潜水者または水中遊泳人との二通りに分れる。フライヤー (飛ぶ人) といふのも、飛行家と飛行士に分けられる。飛行家と譯した場合は、大西洋を横断したりインドバグのやうな民間の飛行家を指すことが多い。飛行士といふと、宇宙飛行士の例で御解りの通り公的な色彩が非常に強い、といふ譯で、公と民との違ひがある。それが英語ではトランスレイターを始めとして、ダイヴァーでもドライヴァーでも一つの意味しかない。尤も日本語の場合は、常に相對する二つの譯し方があるといふ譯

ではなくて、例へば柔道家や剣道家がゐて、また武藝者といふ呼び名がある。武藝者は、柔道家や剣道家に對立する言葉ではなく、兩者を含む言葉です。それに似た言葉としては、俳句をひねる人といふことで、俳人、俳諧師、俳家の三語は、意味上の區別なしで使はれてゐる例です。

日本語に於ける職業的な意味を表す「家」といふ字、なになに家といふ尊稱と、一時的な動作を表す「者」といふ言葉が常に對立してゐるとは限らないと今申しましたが、英語と較べてみると、概して日本語の方が、英語の一つの言葉を幾つかの日本語に譯し分けられることが多い、といふことになりませう。

例へばインヴェステイゲイター (investigator) は捜査官であり、調査者でもあります。FBIなどの「Gメン」は「捜査官」、私立探偵は「調査者」です。意味上、公職名であるのか、個人としてたまたま従事してゐる仕事を表す普通名詞なのか、といふことを區別しないと、判り易い日本語に翻譯できないといふことです。

ところで、日本語で或る物を分類したり、細分化したりすることが非常に多い分野、或いは領域として擧げらるゝのは稲作や魚介類でせう。火や降雨 (レインフォール) 多種多様。それに對して英語では、家畜や酪農動物、鐵や銅などの鑛物、星などの天體が特有で、これらは日本語では、

餘り區別や分類が行はれてゐない、といふより、元々さうした物自體が餘り日本人の關心を惹いてゐない譯でして、近代に入つて世界各地の文物の交流が盛んになるにつれて、かうした關心が次第に偏りがなくなつて來た。その分、文化的な特徴が失はれて行くばかりか、人爲的には變化させられなかつた筈の自然環境までがじわじわと地球規模の異變に曝されてゐる。例へば、降雨にまつはる日本独自の命名體系が段々に崩れて來て、小糠雨とか五月雨とか霧雨とか、さういふ味のある言葉が使はれることが少なくなつてきた代りに、戰前には全く聞かれなかつた集中豪雨といつた氣象語が出現して、日本の雨文化を容赦なく變へて行く。さういふ側面が強くなります。

鐵道文化——鐵道に關する文化に於てもさういふ變化が起つてゐます。勿論、トレイン (train) ——連なるもの、といふ語源の原語は列車と譯するのが普通でした。曾て電氣機關車が登場する前、蒸氣機關車が牽引してゐた時には、何車輛かが連結して連なつてゐることを意味する、このトレインといふ、譯せば列車となつてしまふ素つ氣ない言葉で譯してゐたものですが、それでは艶消しだといふことで、私などは大抵、汽車と譯してゐました。蒸氣機關車の牽引する客車、それを汽車と呼んでゐた譯です。しかし、今では餘程の僻地でない限り、電氣機關車の時代になつてゐま

すから、電氣機關車が先導する客車のことを何と呼んだらいいのか解らない有り様です。そしてまた、新幹線でも原型的には何輛おきかにモーターのある電車なのに、なぜか電車と呼ばない。その邊の鐵道を走つてゐるローカル線だけを電車と呼んでゐる。結局、列車、電車、新幹線といふ三つの呼び方があることになります。それが英語では全部トレインといふ一語で表現されます。もちろん新幹線のことを彈丸列車、ブリット・トレイン (bullet train) と表現することもありますが、

ところで川端康成の雪國のことですが、冒頭の「國境の長いトンネルを過ぎると雪國であつた」といふ文章の英譯は「ザ・トレイン」で始まつてゐるんです。日本語には無い主語を持出してきてトレインと主語を設定しないと文の納りがつかなくなつたわけです。それも人間ではなく、機械の主語を・・・ところで、川端の雪國を譯したサイデンステッカーは、うんと原文を切り詰めたさうです。雪國の文章を抄譯したことになる。だから英語の讀者によく讀まれたのだと。少なくとも日本の文藝作品の場合、いつた人名譯者によつて翻譯された文章をネイティブの名譯者が短く「カット」してしまふ、さうしないと、西洋、英米では、名譯として認められないとか。難しい問題です。

次は辭書の話になりますが、難しい言葉だけを集めた難

語辭典 (Dictionary of Problem Words and Expressions) といふのがあるのですが、その中にアドホック (ad hoc) といふ言葉がある。この頃、日本でも使はれるやうになりましたが、どうも中心となる意味がよく解らない。日本語の辭書を見ると、中途半端とか俄か仕立のとか悪い意味が出てゐて、本當のアドホックの意味である臨時委員會といふ様な時の「臨時」の意味が、日本で使はれてゐる英語の辭書には一つもない。

次はレアリファイド (varifed) ーレアは生なとか稀薄なといふ意味で、その過去の分子形の形容詞がレアリファイドでして、日本で作られた英和辭典を見ると、高級なとか高尚なとか高レヴェルのとか、最後には崇高なとかいふ意味まで出て来る。ところが、最近英國で出た辭典「コンテンポラリー・イングリッシュ」(現代英語辭典)を讀むと、レアリファイドは「ものをけなすのに使はれるけなし言葉だ」、と出てゐる。日本語の辭書の意味と全く逆なんです。なぜ「崇高」が「貶し」や「蔑み」の對象になつてしまふのか、と疑問に思つて二人の外人に訊いてみると、一人はレアリファイドには悪い意味はない、と言ひ、一人は兩方の意味を持つてゐるんだ、と言ふ。リスベクタブル (respectable) といふヴィクトリア時代を形容する言葉が「尊敬すべき」「御立派な」といふ意味と、皮肉な

意味で「御上品な」といふのと、兩局面を持つてゐたのと同じやうな現象だと説明してゐました。しかも、けなす目的で使はれるといふ但し書きは、誰の目にも付くやうに大きく印刷されてゐたのですから、よほど自信のある解釋なのでせう。

このレアリファイドを兩方の意味を含ませて使ふにはどうすればいいか。それには、ある日本製の英和辭典に出てゐた、「雲の上の」といふ表現が比較的穩健にその意味の全體を表してゐると思ひます。雲上人といふ時の「雲の上の」といふことで、「雲上人」のやうに言葉の意味が二重になつてゐる場合は、含蓄の深い意味を持つ日本語の譯を選ばなくてはならないといふ一例です。

會て米英中の三國が日本に無條件降伏を要求してポツダム宣言を發した。その時、日本政府は黙殺するといふ回答を出した。それを日本の翻譯官はイグノア (ignore) と譯した。或る人は、イグノアでは強過ぎる、だから日本に原爆が落ちてしまつたのだ、と解説を加へてゐましたが、黙殺は殺すといふ言葉が入つてゐるけれども殺すは助辭のやうなもので、惱殺するといふ言葉でも解る通り、強い意味ではない、といふのが正確な語釋ですが、感情的にこの字を讀んで文字の音を聴くと、殺すんだからやはり相當に物騒な言葉であるといふことになりませう。それを通譯官は單

に目もくれない、といふより、譯語としてはもつと柔かなイグノアといふ、無視を意味する英語に譯した。つまり、實際の言葉よりも穩健な言葉を選んで米英に回答したといふ話になる譯です。

以上、二つの例からも言へることは、二ヶ國語をうろついてゐるとすべての點で上首尾に原語と譯語が對應する場合は、新市場で出回つたばかりの新製品ぐらゐのものだらう。原・譯の兩語でその意味にふさはしい音と字形をもつものは皆無に近い。

すべての要素をからめて総合的に考へてみると翻譯は、宇宙で一番複雑な作業であると英國の批評家が言つたのは、けだし至當なのであります。これは少しも誇張ではない。色んな要素が絡み合つてゐて、一本づつはごして行つたのでは却つてこんぐらかつて、纏れに纏れてしまふ、といつたやうなところさへあります。

ところで、ピクチャー・ディクシヨナリー——繪で見る英語辭典がドゥーデンといふ獨逸の會社から出てゐます。普通、物品の名前だけが言はれたり、書かれたりしてゐても、日本に前からあつたもの以外は解らない英語の物品名が多いのですけれども、このピクチャー・ディクシヨナリーを使ふと、視覺的に、すぐ、ああこれを言ふのか、かういふものだつたのか、といふことが解る。その點では便利

なのですが、惜しむらくは、かういふこともある。……例へば、圖書館の蔵書室に入ると、棚の四面全體が本棚に立つてゐる。本棚の上の方は手が届かない。そこで梯を立て掛けておく。この梯のことを何といふか。ただラダーではをかしい。本當は英語でも日本語でも、何梯と言へばいいのか、専門の業者でないと、どうしても解らない。勝手にスライディング・ドアと名づけても、上にスライドして伸びるのか、横に移動可能なのか、それも解らない。さういふ見た事のない物品名を頭腦の中でヴィジュアルイズ（映像化）することが出来れば翻譯は非常に簡單になるのですが、それがなかなか出来ない。そこで辭書によつては、普通の辭書でも、映像化しにくい單語、物質名詞にはその物質の繪が掲げられてゐる。

もう一つ辭書について述べておきませう。英語の固有名詞の發音辭典に本當に網羅的なものが少いといふ苦情です。日本語に譯すときに例へばブツシュを改宗させた通稱ピリー・グラハムのグラハムはグレアムが正しい發音表記なのに、もつと有名な（小説家の）Grahamであるグレアム・グリーンはグラハム・グリーンとは表記しない。グラハムと綴つてグレアムと發音するのがならはしである。ピリー・グラハムの場合にはグレアムといふ傳統的な表記を棄ててゐるわけだ。ハックスレーの表記の仕方も、促音や長音の關

係で何通りもあり、辭典によつて發音表記が異つてゐる。長音で、リーとやるか、リイとやるかといふ問題です。

人名表記の問題で想ひ出しましたが全國地名保存聯盟といふ團體がこのたび組織變へをして、榊原さんといふ篤志家が全國の似非合理主義的地名變更について資料を整へて反對運動を繰り廣げるなど運動を擴大してゐます。これは本協議會の理事會で提案する方がいいかもしれませんが、原則論の主張などでも、本協議會の方針と全く一致する點が多いので、是非提携を圖つてみたら如何でせうか。

「者」と「家」に續いて「事」と「物」といふ二つの言葉がどういふ風に日本語で使はれてゐるかといふと、例へば「そんなの大した物ぢやないよ」とは言はない場合がある。傘を忘れて來た事實を言ひたいのに「そんなの大した物ぢやないよ」と言つてしまふと、意味が違つて來て、忘れて來たといふ事實ではなくて、忘れて來た傘なんか大した値打はないよ、といふ意味に變つてしまひます。傘を忘れて來た事自體は、そんなの大した事ぢやないよ、と言ふのが普通です。事象とか現象とか事柄、要するに行ひ、動き、在り方など、抽象的な「事」を使ふ譯です。それに對して形をなしてゐる物體や人間に感知できるやうな物質には「物」を使ふのが日本語の一つの特徴ですが、これが英語だと、例へばシェイムといふ名詞は物にも事にも使へる

日常語で、「恥」と譯せば事になり、「恥知らず」と譯せば物または人物になる。また、トリヴィアル・シング (Trivial thing) と言へば、詰まらない物でありながら詰まらない事でもあるといふ両面性をもつ熟語になる。そのシングほどではないけれど、マターといふ語も兩義的で、事柄と物質の兩方を意味する。どうしたの、どうかしたの、といふ意味を言ひたいのに「何をしたいのか」と訊くのは、状況に對する質問と、意志・意向に對する疑問とを全く混同してゐるのです。従つて、この場合のマター (意向) は、事について述べてゐることになる。ところが、同じマターでも、ソリッド・マターと言へば文字どほり固體になります。ミネラル・マターなら礦物、アニマル・マターは動物、ヴェジタブル・マターは植物のことです。以上、マターは事と物の兩方を意味してゐる、といふのが要點です。

アフエアも主な意味は事件であり、行事であり、状況である。それは全て「事」に屬する意味です。ところが、事が中心のこの名詞でさへ、「しろもの」といつたニユアンスで品物を意味することがあるから妙なんです。もう一つをかしいのは、アーティクルといふ名詞です。普通、條文とか論説とかを意味するこの單語にも、セツトすなはち「一式」に對して「單品」といふ意味合ひで商品などを意味する用法があるのです。さう言へば、項目や品目を意味する

アイテムといふ名詞も、例へばクロージング・アイテム (洋服目) でさへ、クロージング・アイテムと複数化すれば、れつきとした衣料品といふ物を表す語となります。この調子で擧げて行くとときりがないので、もう一つだけで止めませう。最後の例はイツシューです。イツシューは問題、論争點とかいふ意味がありますが、雑誌などの發行部數といふ意味もあります。をかしくなるのはそこから邊からで、ジス・ウイクス・イツシューと言へば、今週號ですが、これは「事」なのか「物」なのかが問題になつて來ます。

もつと解り易い本の例で言へば、「物としての本」といふ言ひ方がありますが、これは本の内容と装丁に分けて使ふ場合の表現で、つまり、「この本は良い本だ」、と言ふ時は本の内容を指して言つてゐるので、装丁のことではない。装丁のことを言ふ場合は「物としての」といふ限定が付く譯です。さう考へると本質的には、本とは物ではなく刷られた言葉といふ「事」に屬する何物か、といふことになり

ます。こまかいことを言ふやうですが、本に書かれた文字は「事」であると言へるでせうか。紙に書き分けたり印刷した文字は昔だつたらインクであり、従つて物だといふことになりませんが、文字には意味があり、意味は物ではなく事です。従つて文字も、それが集つた本も、本質は事であ

り、それが紙といふ物質に收められて物體として存在してゐる、と考へることが出來ます。

そもそも英語は一語であつても動詞と名詞との兩方の意味を持つことが多いのはご存じでせうが、その他に、更に一語で物と事とを同時に言ひ表すことが出來るといふ點に英語と日本語との大きな違ひがあります。日本語でも、例へば通信、宗教、信仰、進歩、保守、絶對、相對、人間關係、時間など、大方の抽象語につく接尾語は「といふ物」だと相場が決つてゐると言つても、これこれの概念は果して「事」に屬するののか「物」に屬するののかと、いちいち思案することなく、感じただけで何となく「物」にしたり「事」にしたりしてゐる場合が多いのではないでせうか。しかし面白いのは、これが哲學的な意味でも當つてゐる場合もある、といふことです。基本的には物と事を區別してゐる日本人である譯ですが、ここで氣づくのは、ある名詞が抽象名詞であるか具象名詞であるかは殆ど意識せずに使つてゐるといふ事實です。これは口が酸っぱくなるほど方々に喋つたことですが、埼京線の新宿驛のプラットフォームに「痴漢は犯罪である」と書いてあるんです。痴漢とは「痴れ者」のことで、男に決つてゐます。「女の漢」はあり得ません。淫らな行爲を働く男を言ふのですから、痴漢が犯罪であるは、をかしい。痴漢は犯罪者である、が正しいのですが。

これは明らかに範疇の取違へです。この間、「痴漢男、地下鐵で走る」といふ、譯の解らない新聞見出しが出てゐました。痴漢男とは、馬の上から落馬して、よりもひどい。

もう一つ、似たやうな例を挙げますと、街中の通りではなくて田舎道の中にはぽつんと立看板が立つてゐた。「公害に協力しましょう」とある。公害撲滅に協力しませう、といふ時の撲滅の意味をネグつてしまつて「公害に協力しましょう」。日本人が如何に文字や語の意味によらずに言葉を浪費してゐるか、といふ一つの例だと思ふのですが、氣分的に、公害は悪いものだ、悪いものには撲滅の必要が伴つてゐる、といふので、公害問題に協力しませう、といふことになつたのでせう。その邊の言語感覺は、日本人はまだまだ磨きをかける必要があると思ひます。

日本人は言葉と現實との間の距離のとり方といふ點で西洋人と最も大幅に違つてゐる、といふのが「トランスレイター」としての私が辿りついた一つの結論なのですが、要するに日本人は言葉を信じなくても濟むので信じようと苦心することなく、さらには言葉につくといふ營みを自覺する必要なしで結構うまくこなしてゐる珍しい民族なのです。

例へば、「戦争はなくならない」と言ふ人は、「これまでのやうな戦争は當分あり得ない」といふ言ひ方とどう自分

の表現を折り合せたらよいか、についても考へてみるゆとりが必要なのではないでせうか。ゆとりは評判が悪いやうですが、ゆとりのないところに文化は生じません。得てして、現實は複雑で、言葉は單純明快すぎるものなのです。

ここで、職歴の出發點を英語教師として印してゐながら後年、英文學も英語も放棄してしまつた漱石のことに話を持つて行きますと、漱石が二年間ロンドンに留學して、三年目に歸國する間の最初期に、漱石は英語で大文學を書きたいとか、英語で英國人と互角に論争したいとか、さういふ希望を漏らしてゐたのに、晩年になつて、たうとう英語を捨てた、と言つては大げさですが「漢字にはゆる文學と、英語にはゆる文學とは到底、同定義の下に一括すべからざる異種類のものたらざるべからず」と斷じて、英語で創作をして英國人と競合したいといふ長年の希望をきつぱり捨ててしまつた。さて、その漱石ですらも早くも學生時代に次のやうな英譯文を綴つて、それを訂正した外國人教師を驚かせてゐるのです。御手元にある別紙の1に記してあるのがその譯文です。

次に英文のあとに書いてあるのが、鴨長明の原文です。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」。英文に意譯すれば、靜かに流れ過ぎる川の水は、絶えず變化して……となることを漱石は「絶えざるものなり、水

の變化は——靜かにすべり行く水の流れは」と表現したのです。次に來る節はかうです。

よどみに浮ぶうたかた。うたかたは、あぶくです。それを *spray* といふ風に譯した。しぶきの *spray*。飛沫です。それは意識的に變へたのか、直感的に意譯したのか解りませんが、濺みに浮ぶうたかた、といふのを、飛沫へと變へて譯し、水の濺むところに浮ぶあぶく、といふ意味が瀧の瀧に立つ水しぶきへと、いはば男性的なイメージに變換されてゐる。飛沫や雫が消えてまた現れるといふのは淡泊すぎて生々しくなく、はかなさの表現としても少し物足りない氣がするといふやうなことが、つつけばあります。全體としての文の流れは完璧に近い。特に、文の流れと一致した言葉として指摘したいのは、第一の終りから三行目の *pebble* といふ一語です。滑るといふ意味でして、川の流れが滑るといふ表現は日本語にはないので、流れを一幅のタブロー（繪）として捉へると、畫面全體が一回づつずつと横に動くアニメ映畫のやうな手法とも見えてくる斬新な表現になつてゐるのです。この「滑る」といふ意味に私は感心してをります。但し、これはデイクソンといふ漱石の先生だつたイギリス人が漱石に命令して「方丈記を譯してみろ」と言つて、そしてその譯を參考にしてデイクソンが修正を加へた上で出來たもので、實際に漱石

がどう書いたのかは解りませんが、ディクソンがその下譯を見て感心して、大いに漱石の譯によつて裨益されるところが大であつたと言つてゐるのです。

それにしても鴨長明といふ古典に英語歴十年で挑戦して大づかみながらその無常感の英語による再表現に成功した漱石の才能と學力は、彼とほぼ同時代の英學者たちの英語學習態度を代表してゐる譯でして、彼らは英語への翻譯、つまり英作文といふものと日本語への翻譯といふものを全く違つた二つの學問の道だと考へるやうな偏頗な氣分の持主ではなかつた譯です。綜合力——文法と讀解の能力が相俟つた萬遍ない學力——が語學には不可缺だとの認識があるの開明期には英語の全體を把握するのだといふ希望を孕んだ向學心と共に、世に満ちてゐたのです。正則といふ言葉と變則といふ言葉が當時あつたのですが、正則は發音、音聲も完全なものを身に着ける。變則の方は書く、讀むだけの英語學習、といふ風に分けられてゐました。中學に入ると、全ての授業は外國人教師によつて行はれてゐたので、地理でも物理でも英語で授業が行はれた譯です。これは、英語が國際語として力を持つてゐるといふことを正しく認められたからこそ可能だつた冒險だと思ひます。

戰爭と言へば、先の大戦での日本の敗因は、戰爭を現實と見ずに「道」と見たところにある。勿論、糧秣の徵發と

いふやうな國際法違反もあつたでせうが、戦闘では敵を破ることよりも潔く戦ふことを以て至上命令となしたので、かつては敵に鹽を送るといつた、矛盾したことも武士道の美學で稱揚された時代もあつた譯です。

そこまで行かずとも、零戦は一對一の格闘技(巴戦)が得意で戦にはそれがものを言つたのですが、後半戦ではグラマンの一撃退避の戦法にやられてしまつた。この戦法は、敵を待んで總がかりで一機の零戦に急接近して猛射を浴せて、すぐに離脱するといふ、全く「さま」にならない、勝敗といふ結果だけを問題にした無粋なやり方で、日本はこれにたいして一騎打ちの流儀をやつたのですから勝ち目はない。

話は漱石から飛びますが、まづ御渡ししてある別紙の2について簡単に申しますと、世紀末詩人の書いた短詩でして、第一行目だけを解説すると——

They are not long, the days of wine and roses,

この *They* は *the days* と同格です。 *The days of wine and roses* を、まづアタマで *They* で言つてしまふ。それで行末で初めて *they* の内容を明らかにする、といふ英語では高度な技術が使はれてゐるのですが、日本語では、この表現法はお手のもので、特に苦勞する必要もないほど自然に口をついて出てくる「レトリック」です。

3、4ともに、原文（各行の各節、各句の順序通りに大體譯せば、それだけで立派な譯詩が綴れる、といふ例です。2は英和、3は和英（立原道造作詩）でやつてみました。

日本語が如何に論理的語順（誰が・いつ・どこで・何を・如何に）を嚴守した時よりも流れ出る言葉のままに、感情の起伏に沿つて歌ひ、語つた時のはうが秀れてゐることか、それがよく解るのが4のaとbの對比です。

5は、「ついで」と「我ながら」といふ「整調語」（調子を整へるためだけに使ふ語）ひとつで譯文が生きも死にもするかの單純な一例でした。

ここで話は戻ります。中學生から英語によつて各學科の授業が行はれてゐたことを先に話しましたが、漱石は、或る意味で現代と同じやうに全科目を英語で教へなくなつた今（當時）の方が正常なのだ、といふ言ひ方で、ネイティブによる各學科教授を批判してゐます。なるほど教育を國民全體に課する以上は早期外國語教授が必要であるといふことは勿論ですが、理科系各學科の授業まで英語で行ふといふのは無茶なこととして、さうならなかつたのは當然の成り行きなのですが、返す返すも残念なのは高等教育の場に於て、英語の全面教育すなはち私の言ふ英文和譯Ⅱ和文英譯の往復通行カリキュラムの必要性があつたにも拘らず、明治以後は譯讀や英文和譯を中心とする授業形式が優

勢となつてしまひ、和文英譯や自由英作文は二の次に廻されてしまつたこと、その點に悔いが残るのです。曾て英語教育大論争といふのがありました、そこではただの一回も實際の英語の譯し方の例は出て來ないのです。制度が悪い、やれ頭の體操だ、やれ教養だ・・と、英語不在の英語論争。

つまり英語の授業はなぜ必要かと言ふと、英國ではかつてギリシア、ラテン語をグラマースクールとしての小學校から教へてゐたのだから、日本でもさうしなくてはいけない。さう言ふだけで、なぜイギリスのローマ・ラテン語に相當するものを日本で英語として學ばなくてはならないのかといふ肝腎の點までは考へが及んでゐないのです。むしろ、英語の必修をやめて、古典と漢文とを習ふ時間をひねり出した方が、よほど有意義ではなかつたかとさへ私は思ひます。

挑戦に對する應戰——チャレンジ・アンド・リスポンスといふ形で思へば、日本は敗戰ではなくて、開戰と同時にこの應戰に失敗してゐたのだ、と言つていい面があります。なぜか。敵國のアメリカが「敵を倒すには敵の言葉を知れ」といふことを實行して、サイデンステッカーやドナルド・キーンなどに軍隊の日本語養成所に入れて徹底的に強化合宿をして研修させた。それに對して日本は英語を

敵性國語として排斥した。しかし、偉い人もゐて、陸軍士官學校が入學試験に英語を採用するのをやめようと吳の海軍兵學校の校長だつた井上成美に言つて來たさうなのですが、外國語の一つや二つ出來ないで何が軍人だ、といふので、井上は陸士の校長の申し出を斷乎として蹴つたさうです。

先日、日曜テレヴィ座談會で中曾根元首相が「英語教育はやめろ」と言つたわ、と家内が言ふので、海軍兵學校出身の中曾根さんも焼きが回つたか、井上大將とは段ちだな、と早とちりしてしまつた。實は、中曾根は同席者の「小學生への英語教育に反對」といふ聲に賛同してゐたまでだつたのだ。「言葉は正確に使はう」といふ訓がここにある。

さて、英作文の話の一つの例として、福田恆存先生の『日米兩國民に訴へる』といふ政治評論の私家版、——先生がアメリカに行くときに向うの知人に配るんだと仰つて、同書の私家英譯版を私が下譯させて貰つたことがあるのですが、その時に先生が書いた日本語の中に、先生が英語雜誌から譯された譯文が入つてゐた。その譯文をまた英語に直すはめになつた譯ですが、原文の雑誌があればその手間が省けるので、どこかに取つてあつたら見せて下さい、と言つたところ、あれは無くなつてしまつたと。仕方なしに私

經つて先生から電話があつて、あの雑誌が出て來たので、くらべてみたら、君の譯と原文は殆ど同じだつたよ、と言はれ、愁眉を開いたわけですが、この話には續きがあつて、中村君の英譯もさることながら僕の和譯もやつぱり良かったんだな、と、いかにも先生らしく誇らしげに仰つてゐました。小説ではまづ起りえない原文—譯文—原文の一致が評論では、實際に起り得るのです。翻譯はだからやめられないのです。

その福田先生の意識的な誤譯と言つていいほど大膽な意譯を時々目にします。エリオットの『寺院の殺人』は、カントペリー大司教が、國王ヘンリー二世と反目し合つたあげく、あらゆる誘惑を差出して大司教の歡心を買はうとした王の申し出を一切はねつけて、王の騎士たちによつて殺される悲劇ですが、その中で “I have been waiting for this all my life.” といふ臺詞がありました。「私は、これを一生待つてゐたんだ」といふ英語ですが、これを先生は「命をかけてこれ待つてゐた」と譯された。うっかりさう譯されたのではないことは、この all my life はどう譯すのかねと、先生が私にお訊きになつたことから明らかです。先生にとつては生涯待つてゐたのも、生命をかけて待つたのも同じ、といふより、後者の方がずつと良いと思はれたのでせう。かういふ藝當はなかなか出来るものではあ

りません。

さて、話は又飛びますが、ジャパニーズといふ言葉を、皆さんはどう譯しますか。ア・ジャパニーズでも、ザ・ジャパニーズでもなく、ジャパニーズ一言、それを何と譯しますか。答は簡單で「日本語」なんですね。「ザ」が付いて初めて「日本人」になる。「ア」がつけば「二人の日本人」です。これは「祖國といふものは母國語のことである」と言つた西洋人が言はうとしたのと同じことを意味する英語の用法でありまして、——「ザ・ジャパニーズ」——日本語を話す者、それが日本人である、といふ風に繋がる譯です。ただ一言「イングリッシュ」と言へば英語のことであり、「イングリッシュ・ピープル」と言へば英國人全體であり、「イングリッシュ・マン」と言へば英國人ひとりです、といふ風に。

今申した金言——「祖國とは母國語のことである」を日本の場合に應用すれば、「日本とは日本語のことである」となる譯です。民族・國民は言語、人種は血統、國家は權力が中心となつてゐるわけで、その中で精神性の質をもつものは國民がらみの言語だけです。この角度から言語を評價し直すのも悪くない筈です。

この頃よく聞く言葉に「日本はやがて日本語だけになつてしまふ」といふ言ひ方がありますが、言語を話し言葉と

見なす限り、言語を話す人が存在して初めて言語があるわけで、考へやうによつては、この言ひ方は心づよい限りで、「日本は日本人だけになる」といふ或る意味で理想的な状態を言つてゐることになります。

いづれにしろ、日本人といふのは要するに「日本語を喋る人」のことである、といふことが、このジャパニーズ、ア・ジャパニーズ、ザ・ジャパニーズ、ジャパンといふ三語の組合せ中に要約されてゐる譯です。まさしくその「日本、日本語、日本人」といふ題名を冠してゐる新潮選書の一冊がありますが、その著者である三人の鼎談者は、日本語は日本文化の根幹であると序文で謳つた以上は、日本語の根幹である日本語の、そのまた根幹である假名遣を正常化する意思を當然抱いてゐる筈ですから、極力その正常化實現の第一線に立つて頂きたい。鼎談録『日本、日本語、日本人』は、大野晉、森本哲郎、鈴木孝夫の御三方が著したものでして、この方々を始めとする多くの有志の御目に、私のこの講演の内容を掲載した今回の機關誌が、留りますやう祈願しつつ、この拙い、喋り方も下手な長講を閉ぢさせて頂きます。

(なかむら やすを・翻譯家・本會評議員)

「別紙」

夢の中へ。

* * * * *

(一) Incessant is the change of water where the stream
glides on calmly.

ゆへ河の流は絶えずして、しかももとの水にあらず、
(靜かに過ぎる流れの水は絶えず變はり)

(三) 夢はいつも歸つて行つた

山の麓のさびしい村に (中略)

しづまりかへつた午さがりの林道を (後略)

My dreams always returned

To a lonely village at the foot of the mountain...

Along a quite still country path...

The spray appears over a cataract, yet
vanishes without a moment's delay.

よだみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久
しくとどまりたるためしなし。

(水しぶき、瀧を覆ふがごとく現れ出でるも束の間に
して消えゆへ)

(四) きのみ、會つたよ、上野驛で、あのおつちよちよ

いのおつちよちよ 竹田のいちやんに。

I met the scatterbrain old boy, Hime Takeda,
at Ueno station yesterday.

(二) They are not long, the days of wine and roses,

Out of a misty dream

Our path emerges for a while, then closes

Within a dream.

(五) He was shocked that he had forgotten.

つい忘れてゐたことば我ながら動轉した。

長くあらず、酒と花の日々

定めなき夢の中より

われらが道、しばし現れ、また消ゆる

(國語講演會 平成十七年十一月十九日 於日本俱樂部)

小學生に歴史的假名遣をへて

中澤 伸弘

私は高校の教員をやつてゐまして、ある経緯から娘の通つてゐる小學校で歴史的假名遣を教へた譯で、お手元の資料の一番初めに神社新報の切抜を貼つておきましたが、細かな實踐をして行くと、何時か實を結ぶもののだといふことを今日は御話ししようと思ひます。

高校は古典の教材があるので、それを使つて歴史的假名遣の指導が出来る譯です。但し讀む指導ばかりで、歴史的假名遣で書く指導まではやつてゐません。そこまではやらなくてよいといふ指導要領になつてゐます。平成になつてから小學校の指導要領が幾つか變つた中で、「小學校でも易しい文語文の音讀を通して、文語文の調子に親しませる」といふ項目が加はりました。さうなると假名遣についてもどうにかなるのかな、と思つてはゐたのですが、高校の教員なので關係はしなかつた。私も曾て千葉の「荒魂の會」の同人でして、後で高崎さんが御話をしますが、その同人でした竹内先生といふ方が本居宣長の『松坂の一夜』を小

學校で歴史的假名遣で教へたことがありました。もう十年も前のことです。さうしたら、大變な事に親の方から文句が來たといふことを聞いてゐました。さて、小學校ではどうなのかな、と心配だつたのですが、このたびは歴史的假名遣を教へてくれと學校の方から言つて來た譯です。

小學校では、全国的に歴史的假名遣について少し緩和されてきたと言ひますか、教材に歴史的假名遣を使つてもいいといふやうに學習指導要領が變つたことで變りつつあるなと思つた譯ですが、いけないのは大人の方で、資料の一枚目に話の枕として、私宛の私信を載せておきました。これは或る地方史の研究雑誌なのですが、そこへ投稿して去年は歴史的假名遣のまま載せてくれました。私は、現代假名遣は難しくて歴史的假名遣で文章を書いてゐますが、今年また續きを書いたところ、次のような手紙が來ました。

「先日中澤さんから投稿原稿を受取りました。遅くなりましたが、編集会議で討議した結果をお報せします。ご存じのように当会は××の歴史を研究し、地方文化の発展に寄与することを目的とした研究会です。但し編集に当たつては出来るだけ幅広い方々に興味と関心を持つて頂けるやうにと考えております。従つて資料の引用は別とし、記述については現代文とし歴史的假名遣いは使用せず、現代假名遣いとし、原則として新假名遣い・常用漢字を使用して

頂くことになっております」

何だかよく解らない文章ですね。で、「つきましては、お送り頂きました原稿をお返し致します」と、突返されてきた。ちよつとをかしいと思つたのですが、現代假名遣にしないと載せてくれないんですね。仕方がないので、現代假名遣に致しまして、最後のところに、「原文は歴史的假名遣で」と書け、と言つてやつたのですが、その後はナシの礫です。もう一つ驚くべきことは、本居宣長に關係する鈴屋學會です。松坂市にある本居宣長記念館。あそこに事務局がある宣長を顯彰する遺跡保存會、そこにある鈴屋學會の會報ですが、次の號に私が歴史的假名遣の原稿を載せて頂いて初校も終つたのですが、その初校と一緒に送つて來た手紙がこれです。「來年度から論文本文については出来るだけ常用漢字、現代假名遣にして欲しい」といふものです。あの世で宣長はさぞ怒つてゐるだらうと思ふやうな、全く何だらうかと思ひます。子供の方は歴史的假名遣に親しませる、文語文に親しませる方がいい、と言つておきながら、どうしたことか、かういふことが大人の社會で行はれてゐる時代なのです。

小學校で授業をするきつかけですが、今娘が六年生で、小學校には連絡帳といふものがあつて缺席する時は電話では駄目で連絡帳に書いて寄越さなければいけない。また何

か行事があるとその後でアンケートが必ず廻つて來るんですね、運動會とか學藝會とか。その度ごとに歴史的假名遣で感想を書いて差上げてゐる。缺席する時も、毛筆で「本日缺席仕り候」とか書いて差上げる。愚妻も歴史的假名遣しか使はない人間なので、どうやら、あの家は家族で歴史的假名遣の人間なのだらうといふ印象になつて行つた。私は今、足立高校といふところに勤めてゐますが、四年前まで上野高校にゐました。上野高校は昔、市立二中といつて福田恆存先生の母校です。會では時枝誠記とか西尾實などといふ方も國語の教員をやつてゐて、その末席を私も汚した譯ですが、そこでやはり學級通信とか保護者宛の手紙も全部歴史的假名遣で書いてゐた譯です。

偶々昨年、娘の小學校の教頭に赴任された方が、會て上野で教へてゐた生徒の母親なのです。そこで、私の歴史的假名遣の文章に接してゐますので、小學校五年の教材で歴史的假名遣を使つた文章が出て來る擔任の先生の相談もあつたのでせう、それなら息子がお世話になつた中澤先生に來て頂いて、小學生に歴史的假名遣を教へて頂けないだらうか、といふ案内が來た譯です。しめた、と思ひましたが、地道に歴史的假名遣を實踐してゐると、さういふことが廻つて來るんだなと思つた譯です。今、定時制高校に勤めてゐる晝間が空いてゐるので、定時制の教頭に、私は小學校

の免許状を持つてゐないのでどうでせうかと言つたら、丁度、都立の高校は今、色々學校改革をやつてゐて、小中高の教員が連係して授業を持つといふことを「夢の架け橋運動」なんて源氏物語の最後の巻のやうな名前が付いてゐるさうで、行つて来いといふことになつた譯です。

それまで小學校の教材を餘り氣にもしてなかつたのですが、それをきつかけに色々調べて行きました。御手元の資料の一番目ですが「主要小學校教科書に於ける歴史的假名遣と文語文の記述」を表にして擧げてあります。會ての上野圖書館、今は子供圖書館と言つてゐますが、あそこへ行くと、これらの教科書を見ることが出来ます。小中高校で使はれてゐるものが揃つてゐるので、教科書を調べようと思ふ方は行かれると調べられます。ただ、今使つてゐる教科書は平成十三年度の検定ではなくて、十六年度、小學校は昨年検定があつて今また新しいものになつてゐます。そつちの方は時間の都合で調べられなかつたのですが、教育出版以下、學校圖書に至るまで、大體五年生で文語文の教材が出て来てをります。

それが大體は韻文、要するに詩ですね。詩とか短歌とか、さういふものを中心にして出て來てゐる譯ですが、をかしなのは、歴史的假名遣の文章が書かれてゐて脇に括弧で現代假名遣の文が書かれてゐる形になつてゐるんですが、文

語文についての説明はあるのに、歴史的假名遣についての説明があるのは「教育出版」の教科書一社だけでした。

上野の圖書館に行つて歴史的假名遣が出てゐる箇所已全部附箋を貼つてコピーして來ようと思ひましたら、著作権があると言はれて、例へば、資料一枚目の下の方は柿本人麻呂から始めて俵萬智、ほかにもあつた譯ですが、全員について、いつ亡くなつたかを向ふの人が調べてくれて、調べて頂くのはいいんですが、その間ずつと待たされて揚句の果に「俵萬智さんがまだ亡くなつてゐないから駄目です」と言はれて殆どコピーが出来ない状態で、私の手書きで寫して來たのです。

面白かつたのは、「やしの実」といふのがあつて、島崎藤村の詩なんですね。これをコピーしたら「島崎藤村は亡くなつてまだ何年……」とか始まつて。しかし御覽になれば判るんですが、島崎藤村のこの改竄された「やしの実」です、題から平假名になつてゐますし、現代假名遣で書かれてゐるのですが、これこそ著作権を言ふのはをかしいのぢやないかと私が突つ撥ねて、この部分はコピーを持つて來ました。

餘談になりましたが、どのやうな文語文の解説が付いてゐるのかと言ふと、まづ①が『はたはたの歌』といふ室生犀生の詩、これは教育出版ですね。一番最後は『はたはた

のうた』、次が『やまのあなたに』、『素朴な琴』といふ三つの教材が並んでをります。その後には『これらの三編の詩では、『言ふ』、『洗はれる』、『思ふ』、『かへり』、『なほ』、『だらう』のように、現代では普通使われぬ仮名遣いが用いられています。このような仮名遣いを歴史的仮名遣いといえます。と書かれてゐます。

家の娘はこの教科書を使つてゐるのですが、歸つて来て、『現代では使はれてないつていつても、家では使はれてますね』と言つてました。

歴史的假名遣の説明があるのは。この教育出版一社だけなんです。②として、橘曙覧の歌を採つたり、啄木の歌を採つたりしてゐる教科書がありますが、その後には「短歌や俳句、川柳には現代では普通用いられない言葉や言い方もあります。例えば『なりにけり』、『いひて』、『軽き』は、今なら『なった』、『いつて』、『軽い』と書くところです。このような表現を、文語、または文語文と言います。と説明してゐます。

まあ、小學生なら、これでいいのかな、と思ふんですけど、ちよつとくだいやうな表現だな、と感じました。

資料の下の方へ行つて北原白秋、佐藤春夫の詩が載つてゐます。「落ちにけり、似たり、などの言葉は昔使われていた書き言葉です」の説明。昔使はれてゐた、と言ふと、

全く死んでしまつたやうな言ひ方なんですけども。

「このような言葉を文語と言います。詩を何度も読んで、文語の調子を味わいましょう」とありますが、どうもしくくりしません。

それから現代假名遣に改竄されてしまつた「やしの実」ですね。「知らぬ、生いや茂れる、新たなり、などの言葉は昔使われていた書き言葉です。このような言葉を文語と言います。詩を何度も読んで、文語の調子を味わいましょう」と、ここにもあります。

かういふことを見て参りますと、歴史的假名遣といふよりも、文語を読んで、その調子を味はつてくれればいい、といふやうな表記になつてゐます。

歴史的假名遣が出て来るんですから、そこへの言及がなされて然るべきではないか、何と片手落ちな編集、教材になつてゐるんだなあといふ氣がしてをります。これが教科書なので呆れてしまひます。

次の教科書も、文語の説明はあるんです。ところが歴史的假名遣が、括弧つきで、かう發音するんだよ、と出て来ながら、その歴史的假名遣についての説明がない。指導要領で、そこまでしないでいい、といふことになつてゐるからなんです。教員の側に、歴史的假名遣について教へることの出来る人がゐるなら、これを一つの教材として發展す

ることが出来るのですが、小學校の先生には、かう申上げ
ては失禮かも知れませんが、その點、心許ないものがあつ
たやうで、そこで私が呼ばれた譯なのです。嬉しいやら悲
しいやらです。

また餘談になりますが、資料一枚目の神社新報では歴史
的假名遣を使つてゐます。以前私は晝間は高校へ勤めてゐ
て、夜は國學院大學神道學科のⅡ部で八年間、神道思想史
を教へてをりましたが、その時やはり神社界は歴史的假名
遣なんだといふこと、そして歴史的假名遣を書けるやうに
といふ授業、そればかりをやつてもゐられませんので、觸
れた程度ですが、神社界は歴史的假名遣だと言つておきな
がら、歴史的假名遣を教へる講義が神社本廳をはじめどこ
にも一つもありません。神職は一萬人ほどゐる譯ですが、
今の若い方々は、やはり現代假名遣しか使へない譯ですね。
この矛盾についても、をかしいなといふ氣がしてをります。
更に餘談ですが、後に神職になる若い彼らに國歌を書いて
御覽なさいと言つて授業をしたことがあるんですが、ま
とにも書けた生徒は本當にゐませんでした。大體もう「いわ
おとなりて」と書くし、譯をさせた時に「なりて」を「岩
がごろごろ音を出して鳴つて」と譯した學生もゐて、かう
なると神職の家庭教育の問題だな、と思つた譯です。
序でに、上野の圖書館に中學校の教科書があつたので、

中學校では歴史的假名遣をどのやうに扱ふことになつてゐ
るのかと思つて、その教材を資料の二枚目の表側に表にし
て載せておきました。上野の圖書館には、五つの出版社の
ものがあつて、大體の教材は『竹取物語』が主に擧げられ
てゐます。歴史的假名遣への言及・説明があつたのが、そ
のうちの三社です。東京書籍と光村圖書は、歴史的假名遣
で書かれてゐる文章は載つてゐますが、それについての説
明は一切ありません。といふことは、小學校のときに教育
出版の教科書で歴史的假名遣のことを教へて貰へなかつた
生徒は、中學校に行つても、歴史的假名遣といふ言葉を知
らないで、高校へ來てしまふことになるのです。

では歴史的假名遣の説明がどのやうになつてゐるかとい
ふと、そこに一社、三省堂の記述を書いておきましたが、「こ
のような古典の仮名遣いは古い時代の発音を受け継いでお
り、歴史的仮名遣い、古典仮名遣いと言います。古典の文
章を読むときには発音に注意しましょう」とあります。

ただ、これだけなんです。やはり讀ませるための教材
になつてゐる譯なんです。さういふ事を踏へた上で、更に
裏側の資料に行きます。これは私が小學校の生徒に配つた
プリントです。これは小學生にはちよつと難しかつたです
ね。高校といふのは學力が或る程度輪切りにされて入つて
來るので大體どのレヴェルで教へればいいといふことが判

るのですが、小學校といふのはピンからキリまであつて、本當に鉛筆を持つたまま動かない生徒もゐれば、しきりに質問してくる児童もゐて、随分授業の仕方が難しいなと思ひました。その授業では歴史的假名遣は讀むだけでなく、書くことも出来るんだよと教へました。一番簡單なのは「は行」ですね。「わいうえを」と言つてゐるところを、語頭以外は「はひふへほ」と書けば歴史的假名遣なんだよ、「おもう」は「おもふ」と書くんだよ、といふやうに、書くことを目的に四十五分間話をしました。もつとも歴史的假名遣の成立ちからやらうかと思つたのですが、時間が少ないので出来なかつたのです。とにかく歴史的假名遣は、書いてみれば簡單なもんだといふことです。昔から日本人の血の中にある假名遣表記ですから、書かせれば書くんですね。すぐ習得してしまひます。難しいのは字音假名遣かも知れませんが、いづれにしる、書けるんだよ、書いてもいいんだよ、昔の表記ではないんだよ、間違ひぢやないんだよ、といふ風に教へて來た譯なんです。初め、教科書に書いてある字が誤植かと、「いふ」は「いう」を間違つてゐるのだらうと思つた児童が随分ゐたんですね。さうではなくて、これが正しい假名遣なんだ、これが、ずつと古くから行はれて來た素晴らしいもので、今皆さんが使つてゐる現代假名遣は、たかが六十年の歴史しかないんだと話した譯です。

資料の三枚目は、その私の講義を受けた時に書かせた感想文なんです。小學生は純粹ですから、理屈は要りません。假名遣を覚えさせようと思つたら小學生のときからやつた方がいいのかな、といふ氣がしてをります。意外と好意的に、それから出來れば書いてみよう、歴史的假名遣で文章を書いていいのかな、といつた感想を寄せてくれました。子供は知識慾旺盛です。漢字にしる假名づかひにしる制限するのはよくありません。

ところで私自身が歴史的假名遣といふものに目覺めたきっかけは、この五年生の感想の下の方に「私はのらくろといふ漫畫を持つてゐて、その漫畫の中に少しですが歴史的假名遣を知つてゐました」と書いた生徒がゐましたが、私も『のらくろ』を讀んで育つたといふか、父親が昭和一桁なので、少年俱樂部の漫畫で育つた世代でして、昭和四十二年に『のらくろ』、『蛸の八ちゃん』、『凸凹兵衛』など一連の漫畫、それから『敵中横斷三百里』、『村の少年團』、『亞細亞の曙』とかが全部復刻されました時に父親が買った、自分の爲に買ったんですね。それを何時の間にか私が讀んでしまつたのです。漫畫から讀み始めて、『敵中横斷三百里』とか、そつちの方まで讀んでしまひました。全部、總ルビで假名が振つてありますから、覺えてしまふんですね。自分の經驗としても、歴史的假名遣を覺えるのは小學

生くらゐがよい。理屈ぬきです。「けふ」と書いてある。「今日」に「けふ」と振つてあれば、これは「けふ」と書くんだと。人間は、さういふことを知ると、使つてみたくなるんですね。それで書くといふ、さういふことが重要なんだと思つてをります。『のらくろ』といふのは良く出来た漫畫で、後の方へ行くと、戦時中の、大陸を中心に戦争をしてゐた時代なので、豚の國、熊の國、山羊の國がある。子供心で読んでゐて、ここはあの國を指すんだな、と判るんですね。トンキン城なんて、そんな名前前で出て來ますから、ああ、ここはあの國だな、と暗示的に判るやうな仕組になつてゐますから。まあこれは餘談ですが。

もう一枚目のコピーは『凸凹兵衛』から取つて來ましたが、これを授業中に使つたんですね。授業の最後の五分か十分、これは歴史的假名遣で書かれた漫畫であるのですが、何の抵抗も児童にはありません。舊字體は出て來ますが、假名が振つてあるので素直に讀めます。かういふ漫畫があるんだよ、と説明しました。さうしたら、その後一週間ばかり家にあつた漫畫を數冊娘が持つて行つて随分回覽して讀んでゐたやうです。ですから、やる側の教員が、さういふ積りがあれば、この後更に發展させて歴史的假名遣について授業の折々に觸れて行けば、小學生でも高學年になれば歴史的假名遣に親しんでそれを書く——初めは間違つて

も結構なんですね。正しく書けるやうになるまでは時間がかかると思ひます。間違つてもいいんですが、「しませう」「おもふ」の表記くらゐは出来るし、やれば歴史的假名遣といふものに親しむことが出来ると思ふんです。

さうしますと、先程の鈴の屋學會のこととか、某地方の研究雑誌のやうな偏見は絶対に生れて來ない筈なんですね。かういふ偏見を持つた大人の方たちが居る限り、子供にさういふ事を教へてもどうか、と思つてゐるのですが、まあ地道な實踐といふことが必要であります。實際、今定時制高校に勤めてゐるので、定時制の生徒といふのは十六歳から始まつて一番上が七十二歳の生徒が居る譯なのですが、年配の方は歴史的假名遣で文章を習つて來てゐますが、私の古典の授業で、その字は解ると言つて頂けますが、まだ若い生徒は歴史的假名遣を教へるのはちよつと難しい實踐になつてをります。

普通の高校ですと、歴史的假名遣は大體書ける。完全に書けるといふ子は一人か二人は出て來ますが、何となく書けるといふ生徒はもつと居る譯ですね。しからは小學校の教材の指導書——教師用の虎の巻と言つてよろしいんでせうか、その指導書に、どのやうに歴史的假名遣について書かれてゐるのか、が氣になつてきました。そこで、私の教へ子で小學校の教員をやつてゐるのがあるので、同

じく教育出版の、これは足立區の小學校ですが、指導書の部分を寫して送つてもらつたんですが、それが⑤としてある三枚目の表側です。小學校の指導書は私も初めて見まして、色々考へさせられることがあつたのですが、單元について「児童はこの單元（はたはたの歌や山のあなたに）で初めて文語調の詩に出合う。詩は使われている言葉の意味だけでなく、言葉の持つ美しい響きをもつて味わうものであり、またその響きは詩に込められた作者の思いと極めて密接に繋がっている。特に文語調の詩は日本語の響きの美しさを認識するのに適した教材である」といつた説明がなされてゐます。

さういつた、響き、調子といふものに重點が置かれてゐる。今『聲に出して讀む日本語』が脚光を浴びてゐるといふやうなことで、それとも重なつて參ります。その隣の「單元構成の意図」といふところでは「この單元は児童と文語との初めての出会いの單元として位置づけられる。歴史的仮名遣いや文語調との出会いを新鮮なものとして児童に認識させることを大事にしたい」とあります。

歴史的仮名遣といふものについても注意させようといふことになつてゐる。その先、更に線の引いてあるところですが。

「文語調の詩を声に出して讀むことで日本語の持つ美し

い響きに親しみ、詩に込められた情感や雰囲気を読み味わふということである。はたはたの歌の音讀を通して歴史的仮名遣いに慣れさせたい。文語調の表現に讀み難さを覚えながらも新鮮さを感じるであらう」などとあります。

同じく「指導のポイント」といふのがあります。指導書といふのは、さういふ風にピンからキリまで丁寧なのです。「歴史的仮名遣いで書かれた作品に込められた作者の思いを児童の心に響かせて行く」などといふのは何の事だか私にはよくわかりません。

學習指導計畫なども「歴史的仮名遣いについて知る」と書いてをります。実際には「知る」までは行かないやうなのですが、その先を見ますと、この教育出版といふ教科書會社は歴史的仮名遣について他の五社とやや違ひまして丁寧なところがあるんですね。一発展問題、注意する仮名遣い」として、次のやうに書かれてゐます。

一七ページに出てる「おほかみ」といふ言葉は今の仮名遣いの決まりに従えば普通「おおかみ」となる筈です。お段の「お」を伸ばす時は、普通「う」を添えて書く。（おとうさん、とうだい、はつぴょう）しかし、實際は「おおかみ」と書きます。これは次のような理由によります。

「おおかみ（おほかみ）」「ほお（ほほ）」「こおる（こ

ほる」「とおる（とほる）」「おおきい（おほきい）」など（かつこ内は歴史的仮名遣い）。「おおかみ」や「ほお」は歴史的仮名遣いでは「おほかみ」や「ほほ」と書き、「とお」は「とほ」と書いていました。このように歴史的仮名遣いで「おし段の音に「ほ」または「お」を添えて書くものは、現代仮名遣いでは「お」を添えて書きます。

これは面白い教材でして、これを發展させれば歴史的假名遣についてかなり深まつた授業ができる筈なんです。

教員用の指導書はどうなつてゐるかといふと、「教材設定の趣旨」として次のやうに述べてゐます。

中学校では竹取物語などの易しい古文を読むようになる。子供たちの身の回りにある一般的な読み物などでは文語調のものは殆ど見られないのが現実であるので、中学への橋渡しの時期として易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと（学習指導要領）を達成しなければならない。

その隣、「活動の留意点」――。

覚えさせることが目的ではないが、教科書のほか以下に挙げるのが主なものであるので提示したい。そして、古くからの言葉の使い方が現代にまで繋がっている面白さに気づかせるようにしたい。

更に、「更なる發展、補充学習」といふことで

古文を音読やCDで聞かせ、親しませたい。

「評価について」では「歴史的仮名遣いについて関心を深めているか」――などとあります。

實際にこれを授業でどういふ風にやるんだ、と教へ子に訊いてみたら、ここまでは手が廻らないさうなんです。これは、時間がなくて、大體すつ飛ばしてしまふ教材なんださうです。時間があればちよつと觸れるくらゐで終つてしまふ、といふ大變勿體ない教材になつてしまつてゐます。他の五社の教材には、かういつた歴史的假名遣に突つ込めるやうな教材がありませんので、残念だなといふ氣もしてゐるわけです。かういつた現状になつてをります。

小學校の教科書は平成十六年度に改定になりまして、今使はれてゐる教科書は更に新しい教科書ですが、それも大體同じやうな教材で同じやうに扱はれてゐます。以上を通してみまして、歴史的假名遣を教へるといふことは、一つは地道な實踐の指導といふことが大切だなと實感しました。二つは小學校の先生がもう少し歴史的假名遣についての興味といふか、指導が出来るやうにならなくてはならないではないか、といふ氣がしました。かの扶桑社の教科書もさうですが、良い教科書が幾らあつても教へる人が碌に教へることができなければ教材を生かすことが出来ないわ

けです。逆に、教師の方が色々な引出しを持つてゐて手を
變へ品をかへ色々なやり方で工夫してやれば出来るのぢや
ないか、色々なことを教科書を超えて教へることが出来る
譯なんです。ささやかな実践ですが、かういふことをやつ
たといふことの一端を御話し申上げました。御清聴有難う
ございました。

(なかぎは のぶひろ・都立足立高校教諭・本會正會員)



(國語講演會 平成十七年十一月十九日於日本俱樂部)

これからの假名遣戰略を考へる

高崎 一郎

「これからの假名遣戰略を考へる」といふ題は、英文學
者の鈴木孝夫先生が二十五年ほど前になさいました講演
「日本の言語戰略を考へる」から拜借いたしました。日本
語を國聯の共通語にすべしといふ壮大な主張で、入會した
ばかりの私はいたく感動しました。それにくらべますと今
日は随分見劣りしますのは御勘辨ください。

●疑問假名遣

さて皆様も御承知のとほり、本年五月、紀伊國屋書店か
ら『平成疑問假名遣』が出版されました。今日はその御禮
と内容の説明にまかり越した次第です。これまで假名遣の
早解りとか入門教科書の類は多かつたのですが、「これが
判断基準だ」と謳ったものには意外にも無かつたのですね。
そのあたりいささか自負するところです。皆様よく御承知
の假名遣の沿革とか意義などはあまり觸れず、ひたすら「具
體的にどう書くのか」「現代の社會で歴史的假名遣は本當

に實踐可能なのか」といつた實務的な視點に絞つて考へてゆきませう。

題名の元にした、「平成」がつかない本來の『疑問假名遣』

とは、大正初めに文部省國語調査委員會から發行された書籍であります。假名遣に諸説あつて一つに決めかねる言葉が少からずある、それを一語一語、當時としては最高の國語學的な知見に基いて決定したものです。これで近代的な假名遣が完成したといふ、地味ではあるけれどじつは大切な本なのです。しかし私は考へたのです。果して國語學上の知見だけで萬事うまくゆくのだらうか、と。

●發端

といふのは、どうも最近の辭書は新しい學説をよく反映するために、出版社により却つて歴史的假名遣が異なる例がはなはだ多い、それからまた地名人名や新語など假名遣に迷ふ言葉が少なからずある、これでは困るではないかと思つたのです。あるいはまた私は小書き假名を使つてをりまして、これには御承知のやうに賛否兩論あるのですが、そもそもこれは「假名遣」の問題なのだらうか、最終的にどういふ文獻を見ればよいのかよくわからないが何とかならないか。少し格好よく申上げますと、「歴史的假名遣の標

準化」を目指したといふ事になります。本書は便覽といふ形ではありますが、むしろJIS規格に近い存在になつてほしいといふつもりです。

私が一應の取りまとめを致しましたが、かういふ作業はとても一人でやれるものではありません。電腦文字研究會といふ、有志の集りがありまして、かれこれ數年がかりで検討を重ねた成果であります。方針に何か誤りがなければ、故石井勳先生や、林巨樹先生に何度もお伺ひしましたのも、忘れられないところです。そのお蔭で、表紙には「國語問題協議會」の名前が大きく入つてをります。そして皆様も連帯責任者になつてしまつたやうなものです。いささか下世話な譬へをしましたが、じつは大切な事だと私は考へます。その理由もまたおひおひ申上げます。

●國語問題協議會の目標

さて、我が國語問題協議會の結成以來の目的は「ひとまづ昭和二十一年以前の正常な状態に戻して、改めて考へ直す」ことだと常々承つてをります。まことに具體的かつ穩健な目標であり、この意義は今日いささかも薄れてゐないと思ひます。

國語の音韻は、江戸時代中期から今日までさほど大きく變つてはゐません。何も慌てることはないのです。契沖や宣長以來、『和字正濫鈔』から明治大正昭和まで、假名遣教科書の數々を今でも違和感なくそのまま使へるのはこのためです。

しかしまた昭和二十一年からすでに六十年近く経ちました。ちやうど明治維新から大正の終りまでが同じ六十年ほどになります。譬へとして適切かどうかわかりませんが、過ぎ去つた年數だけ比較するならば、昭和初年ころに江戸幕府の再興を願ふやうな運動を我々はやつてゐるとも言へるのです。

●「インフラ」としての假名遣

それほど六十年の間に社會は大きく變りました。一寸と個人的な話を交へませう。數年前になりますが、私の知人がある時ふと歴史的假名遣について調べたいと思つたのださうですね。今は何でもかんでもインターネットの時代ですから、彼もまづ「かなづかい」で検索し、そこそこの知識は得られた。しかし、何だかもう一つ足りない気がする。はつと氣づいて「かなづかひ」で再び検索したところ、今は歴史的假名遣の復興を目指すホームページばかりで、

全く別の世界のやうだったといふのです。「期待以上の成果でびつくりしたよ、ネットの世界はじつに奥が深いものだ」と彼は喜んでゐましたが、私はこの話を聞いて「やはりこれはまづい」と感じました。

人間の目には「かなづかい」でも「かなづかひ」でもたぶん同じものだなどと判断できる、いや綴りが違ふことさへ意識しないかもしれせん。しかし機械は一字違つても別物です。これからは我々がどんなに情熱を込めても、「かなづかい」以外の書き方は社會から弾き出され、誰も發見できない「存在しないも同然」になる、いはば究極の國語統制が完成したとも言へます。

つまり今や現代假名遣は「インフラストラクチャー」の一種、つまり産業や生活の基盤になつてしまつたのです。現代社會は地名にせよ人名にせよ、さまざまな索引によつて順番づけられてゐます。索引があればこそ携帯電話一つで待ち合せの場所を調べたり、電話番号や地圖まで確かめる、さういふ便利さを我々は既に満喫してゐます。銀行でお金を引き出すのも、新幹線の指定席を取るのも、すべて現代假名遣が基礎になつてゐます。善し惡しは別にして、「果して歴史的假名遣はこれにとつて替り得るか、本當に

六十年前の世界にひとまづ戻れるのか」を一應は疑つてみた方がよろしいでせう。

●機械も賢くなつてゐる

しかし決して希望を捨てる必要はありません。あまりに杓子定規な世界は、機械には都合がよくても、人間には窮屈なものです。よく引かれる例が、格助詞の「の」でせう。「の・ノ・之・乃・廻」どれも同じことですね。横網の「貴ノ花」と「貴乃花」が別人であつたら困ります。ひところ「お茶への水」や「自由への丘」など地名を統制してきたのも、機械處理に都合よくといふ思想を徹底させた結果なのです。しかし最近「強制的」は何かと嫌はれますし、そこまでしなくてもよくなつてきました。ためにネットワークで検索してみてください。「みづほ銀行」でも「みづほ銀行」でも同じ結果が出ます。

やれ嬉しや歴史的假名遣でも大丈夫なのだ……といふわけではありません。さうではなくて、國語の能力が劣る人はジグズツの四つ假名がうまく入力できない可能性がある、それでもうまく通りつけるやうにといふ、有難いやうな、考へやうによつては大きなお世話の配慮です。機械もだんだん賢くなつてきてゐるのです。といふ事はこれを逆手

に取りますと、「かなづかい」と「かなづかひ」は同じものなのです。よ、別系統のシステムがあるのですよと教へ込めるのです。

●厳密かつ機敏なデータ

ただしそのためには、きつちり厳密なデータが必要です。機械は「あとは類推」など絶対にしてくれませんから、つまらぬ作業だとぼやかず、何から何まで全部説明しなければいけません。だからこれまでの假名遣教科書だけでは不完全なのです。また今まで無かつた銀行名「みづほ銀行」が新しく誕生したら、即座にデータを追加する機敏さも必要です。

理念としては「ひとまづ昭和二十一年以前の正常な状態に戻し、考へ直さう」かもしれませんが、既に現代假名遣で構築された社會のシステムは龐大です。我々はこれを経史的假名遣に「修正する」といふ手段しかあり得ないのではないかと感じますし、それは決して無理ではありません。「現代假名遣などといふ存在は認めない」と口では言ふのは結構ですが、我々自身がさう信じてしまつたら絶対いけないのであつて、むしろ人一倍よく現代假名遣を研究すべきです。

●もし歴史的假名遣が復権したら

ここでちょっと想像をたくましくして下さい。平成二十何年か、遂に我々長年の念願叶ひ、歴史的假名遣が公的に復活したと假定いたしますよ。當然ながら公文書や教科書、それから新聞なども全面的に歴史的假名遣となります。鐵道の驛名、バス停の名、高速道路の案内などももちろん書き替へられる筈です。

さうすると内閣府あたりからきつと問ひ合せがあるでせう。市町村など地方自治體名の正しい書き方の一覽資料はないか。郵政公社は郵便番號のついた地名の全データを質問してくるでせうし、NTTは電話帳の編輯に困惑するでせう。全國の住民票を手直しするため、日本人の姓名を網羅した客觀的な修正データが必要で。我々はさういふ想定をしてゐるでせうか。あるいはまた、「みずほ銀行」といふ名前は不適切だから、行名變更のための行政指導をすべきかどうか、線引きを求められるかもしれませぬ。

何より一番身近な國語辭典が、揃つて現代假名遣順のままではくやしいといふものではありませんか。二十年ほど前でしたか、『大言海』を現代假名遣順にならべ直したも

のが出版されました。あの時、誰一人として「本來のものの方が引き易かつた、なぜ改竄するのか」と抗議しませんでした。假名遣を正すとは、單に「わ」を「は」に戻すだけに止らない事を認識しなければいけません。今や社會全體の基幹を揺がす、大きな影響があるので。

●正字正假名だから時代遅れなのではない。

正漢字や正假名遣だから時代遅れなのではありません。臺灣では何らの不自由なく正漢字でネットワークができてゐます。申申閣の日本語入力システム「契沖」は字音假名遣も含めて快適に使へます。要は時代の變化にどう應へてゆくかです。かなりの勞力が要りますが、不可能ではありません。十萬種以上の漢字を集めた「今昔文字鏡」など以前ではできなかった、現代ならではの成果だと思ひます。

●特急「かいじ」

私がかういふ事を考へ始めたのは何時ごろだったか、もうずいぶん前ではつきりしませんが、一つ鮮明な記憶があります。ある日、宇野會長がふと仰いました。東京と甲府を結ぶ特急列車に平假名書きの「かいじ」といふのがあるが、どうも困つたものだ。せめて「かいぢ」でなければ「甲斐への道」でなくなつてしまふ。

その時はなるほど思っただけでした。ところがそれから程ないころ、東海林太郎の「赤城の子守唄」を聴きながら「東海林（しやうじ）」はどう書くのかなあと思つたのです。調べ始めるとこれが意外に手ごはくて、どうもよくわからない。戦前の人名辭典を引いたつて、當時は流行歌手「ごとき」者は載らないですね。これは困つたぞと、あれこれ言葉に注意するやうになりました。さうすると出てくる出てくる。

本棚の古い資料を探してみますと、平成十一年ころから協議會でいろいろ發言を始めたやうです。たとへば協議會の名簿を槍玉にあげて、これは現代假名遣の五十音順ではないか、けしからんと發言いたしました。小うるさい事で、さぞお氣を悪くされた方も多かつたかと改めて御詫びいたします。でも大切な事なのです。

手許の資料にいろいろ思ひ出深い言葉をならべました。「まんぼう」とは「満方魚」であるとは山森さんが教へて下さいました。「鰻車魚」がなぜ「まんぼう」なのか、國語辭典では全くわかりません。また松岡さんから御指摘ありました「芋莖（ずいき）」なども漢字からは導けません。

長野縣の「上高地（かみかうち）」は元「神河内（かみかうち）」であるとは宇野茂彦先生から教はりました。近年の改名ながら、假名遣は奇妙に一致してゐるのが興味深いところですよ。ところが同じ「河内（かうち）」でも、百人一首の「凡河内躬恆（おほしかふちのみつね）」は上代の名残で「河内（かふち）」なのです。身近にありながら、市川さんに指摘されるまで恥かしながら氣づきませんでした。今日はお見えになつてゐないやうですが、他にも横山さんや谷本さんなど、多くの方に支へられて初めて誕生した『平成疑問假名遣』なのです。

●假名遣は表記法の一つ

その一方で、どうしても肯ひ難い御意見もありました。
・「假名遣は場により時に應じて融通無礙に使へばよい。」
・「漢字に隠れる言葉は無理に穿鑿せずとも、實用上は差し支へなし。」

・「俗語流行語のやうな浮ついたものは考へるに及ばず。」
これらには正直戸惑ひました。假名遣とは八百年前の定家卿の時代から、融通無礙に書かれては困るから決めた規則なのです。假名遣とは表記法の一つです。表記法とは語の書き方を安定させるための社會的な規範です。協議會の誰それに聞いたら「くぢら」だが、別の人は「くじら」がよ

いといふ、それでは「かつて存在した不完全な表記法」に過ぎません。

御参考まで「工業標準化」の解説を掲げます。参考になるとは思ひませんか。

「日本工業標準調査會：工業標準化—工業標準化について」

<http://www.w3.org/TR/html4/loose.dtd>

標準化 (Standardization) とは、「自由に放置すれば、多様化、複雑化、無秩序化する事柄を少数化、單純化、秩序化すること」といふことができます。また、標準（規格・Standards）は、標準化によつて制定される「取決め」と定義できます。標準には、強制的なものと任意のものがあります。一般的には任意のものを「標準（規格）」と呼んでゐます。「原文略字現假名」

そもそも言葉は自然のものであり、恣意的な取決めそのものを否定する御意見はわからぬでもありません。何と言つても戦後の國語統制こそ未だ醒めない悪夢です。ただ、それが行過ぎて「表記法」そのものの否定になるのは如何なものでせう。もちろん言葉といふものは、さう何でも一つにきつちり決るものではありません。「くじら」といふ

用例があるのなら、一切合財が歴史的假名遣でよいぢやないか、とするのも一法です。しかしそれならそれで「兩方とも可、ただし從來からの慣例はくぢら」などとしておかないとすぐに「多様化、複雑化、無秩序化」してしまふ。それでは困るから我々は集つてゐるのではなかつたでせうか。

●何を「濫りに改めず」か（結論一）

もう時間がありません。一舉に結論を申し上げます。まづ「假名遣は濫りに改めず、次代に受け繼ぐのが基本」、これは言ふまでもない大前提です。では何を受け繼いでゆくのか、これが曖昧なのです。悲しいことに明治以來、それを端的に説明した文書は一つもないのです。昭和二十一年以前、假名遣が社會全體に定着してゐた時代にはともかく、これからは絶対さうはゆかない。またきつちり説明できないものは、何となくわかつたつもりでも、じつはよく理解してゐない場合が多いのです。『平成疑問假名遣』の冒頭に『正假名遣』といふ一節があります。これこそ假名遣とは何か端的に説明するため、電腦文字研全員が多年苦心をばらつた成果です。

●學術的な判断の限界（結論二）

そして先程まで紹介してきましたやうに、目の前の事實として、假名遣に迷ふ語が少からず存在します。歴史的假名遣は延喜天曆時代の用例に基いて判断するといふ定義になつてゐますから、學術上の成果によつて判断するのが當然の基本であります。ところが最近の辭書は「最新の學說」を競ふあまり、甲社は「くぢら」だ、乙社は「くじら」だと思見が別れてしまつてゐるのです。これでは却つて「多様化、複雑化、無秩序化」ですね。もし「くぢら」か「くじら」か判断できなければ、慎重に「未詳」と結論づけるべきなのでせう。しかしそれでは極端にいへば「その言葉は歴史的假名遣では書けない」のです。

●判断基準の標準化（結論三）

つまり表記法といふ立場では、「とりあへず」でよいから何らかの座標軸を決めることが殊の外大切なのです。もし間違ひがあれば、心ある人から指摘があるでせうし、したら次の機會にきちんと訂正すればよいのです。そのために判断基準を標準化させるのが肝要です。語源重視なのか、漢字とのつながり重視なのかといった事だけで假名遣が變つてしまふ言葉が少くありません。『正假名遣』でなるべく簡潔に示したつもりですが、なほ御批判をあふぐところです。

●學術や思想とは別物（結論四）

つまり「歴史的假名遣は學術の成果を基礎とするが、學術そのものではない」といふことです。また思想や精神運動そのものでもありません。學術や思想を輕視せよと言つてゐるではありません。區別して考へるべきなのです。場合にもよりけりですが、イデオロギーが伴ふと目が曇るやうな氣がしてなりません。先程の「俗語流行語のやうな浮ついたものは考へるに及ばず。」といふ意見など、氣持はよくわかるのですが、やはりそれは別の次元の問題だらうと言はざるを得ません。

●我々は「ユーザ代表」（結論五）

では誰がとりあへず「くぢら」か「くじら」か決めるのか。それは断然、我々を含めた日本國民全員です。中でも歴史的假名遣に關心ある我々は、いはば「ユーザ代表」であります。よく勘違ひされるのですが、歴史的假名遣は現代の文章のための假名遣です。先人の成果を咀嚼した上で常によく整理を心掛け、不明があればよく補ひ、時代の要求を満してゆくのは國民全員の責務であります。

『平成疑問假名遣』はそのための試作品です。今はまだ

奥付に私の名前が載つてゐますが、私ごとき者の個人的な著作に終つては困るのです。冒頭で「皆様も連帯責任者」だなどと申上げましたが、ぜひ本書を徹底的に批判してほしい、または對抗馬としてもつとよいまとめを作つてほしいと切に願つてゐます。「平成十七年版」と謳つてゐますやうに、少くとも数年ごとに必ず改訂を續けますが、いづれ國民全員の共通理解となるやう期待してゐます。その頃には私の書いた内容など全く無くなつてゐてもよいですから、統一見解が定着しますやう祈る次第です。

●言葉さがしをしよう。

今日からできる事で、皆様に御願ひがあります。言葉さがしをしてください。『平成疑問假名遣』出版直前に、「つんだ（豆打）餅」「いいちこ」をふと目にして、慌てて項目を増やしました。「ちこ」とは大分の方言で強調の意味、「良い+ちこ」だから、焼酎の名前は「いいちこ」のままよいことになりました。言はれてみれば成程なあで終るのですが、身近な言葉ほど意外に氣づかないものです。

よく「しつかりした國語辭典が一冊あれば、假名遣に迷ふことはない」と言はれますが、私には到底信じられませぬ。少し言葉に注意してゐれば、いくらでも出てきます。

大勢で力を合せ、言葉を集めてゆかうではありませんか。皆様それぞれの専門分野など、まだまだ面白い言葉が眠つてゐます。

●defect standard（事實上の標準）

次に協議會に御願ひがあります。何らかの手段で標準化を推めてほしいのです。協議會の従來からの戦略は「内閣告示の撤回」だつたと思ひます。それもよいのですが、また一方に「defect standard（事實上の標準）」といふ手法もあります。たとへば各種辭書の出版社に對して、歴史的假名遣の統一を勧告できるやうな團體は本會を措いて他にありません。ぜひ宜しく御願ひいたします。

●「あむ」「くゐやう」

もう言ひたいことはあらまし言ひ盡くしました。嬉しいことに『平成疑問假名遣』へ、既にいろいろ御意見が寄せられてゐます。「あむ」「くゐやう」などといふ假名遣は見ることない、といふ御批判が多くありました。最近になつてやっとこれを採用した辭書がいくつか出てきましたが、確かに「見慣れない」のは事實です。ただ國語學上では常識的なことですし、何より假名遣の定義上これが正しいといふ事になつてゐますので、積極的に採上げたまでです。

● 假名遣を理解する助けとなる語

また「變な言葉ばかり入つてゐて、本當に探したい言葉が無い」といふ感想もありました。お氣持はよくわかりますし、もつと親しみやすい辭書を作りたいと願つてゐます。ただ、今回の目標は「假名遣の性格をよく浮き彫りにすることにあります。従ひまして基本語と難しい言葉しか収録してゐません。具體的には『私の國語教室』と『假名遣ちかみち』の収録語を基礎としてゐます。基礎語にも「泥障（あふり）」といった、死語に近いものもあります。ところが青森縣に「泥障作（あふづくり TOSIBUZE）」といふ地名があるのですね。つまりその地で育つた人にとつては身體の一部なのです。それにもかかはらず假名遣を調べゐるのに難澀する、そんな時にこそ『平成疑問假名遣』を出動させてください。日常ほとんどの用は、國語辭典で間にあひます。

「變な言葉」が増えたのは、今回「假名遣を理解する助けとなる語」を収録したためでもあります。たとへば茨城縣の「水海道（みつかいだう）市」から「水（みづ）」が導ける、さう認識すれば俄然面白くなつてきませんか。日常何氣ない言葉の中に假名遣の記憶は潜んでゐます。特に

字音に結びつくものが多く、いろいろ參考になると思ひます。字音假名遣の話を始めると、どうも難しいものだと敬遠され勝ちですが、意外に簡単に記憶できるので。

お手許の資料で、いくつか例を挙げました。「相模（さがみ）國」から「相（さう）」、「芳賀（はが）さん」から「芳（はう）」とわかりますし、略字の「罍（ゐ）」は和語「井（ゐ）」からきてゐます。また假名文字の元になつた漢字を考へますと「爲（ゐ）」「惠（ゑ）」など憶えられますね。また鳥の「郭公（くわっこう）」はその名のとほりに鳴きます。ですから「公（こう）」であつて「かう」とか「かふ」などにはなりません。越南の「東京（トキン）灣」から「東（とう）」、「桑港（サンフランシスコ）」から「桑（さう）」が導けます。面白いのは「蓋（かふ）」ですね。漢文で「ナンゾクセザル」と習つたはずですが、これは「何（か）十不（ふ）」の早口言葉なのです。森鷗外の子で早逝した「不律（フリッツ）」とは「筆（ひつ）」の事だったのですね。

「法」は「漢音はふ・吳音ほふ」で、特に佛語は吳音讀みいたします。なるほど「法華（ほつくゑ）」「起上がり小法師（こぼし）」は佛に縁ありますし、「御法度（ごはつと）」や「法被（はつび）」はさうでもないですね。身

近な言葉をうまく當てはめずと、字音假名遣も現代に生きてゐるのだなあと實感できます。最近では大學の第二外國語到北京語が増えてきましたから、じつに前途は洋洋たるものです。同様の例が『平成疑問假名遣』にぎつしり詰込んでありますので、ぜひ謎解きの心持ちで御覽になつてください。本日は御清聴ありがとうございました。

(たかさき いちろう・高崎齒科醫院院長・本會評議員)

眞

言葉の雑學 (六)

鹽原 經史

「かかづらふ」「つまらぬことにかかづらつて、とんだ災難だつたよ」などと用ゐる。『倭訓栞』に「かかりつらなる義なるべし」とある。さういへば、自分にとつてはあまりよくない事象に引つ張り回される時間の連なりが語感の中にある。歴史的假名遣ひはツを用ゐる。

「かけづりまはる」あちらこちらに忙しく走り回る意だが、カケは駆け、マハルは回る。では、ヅリは何か恐らくは「連(つ)り」であらう。連続して走り回る。と考へると語義の由来が見えてくる。ちなみに、連なる・連れる・釣る・蔓(つる)などは同根である。

「かたづ」現代假名遣ひの本則はカタズ。固唾の表記通りズはツバからの變化だ。戦後の國語政策は「唾」の漢字自體を常用漢字の枠から締め出し抹殺したからだからカタズのズが何であらうと構はないのかもしれないが、それは天に向かつてツバするやうなものだ。

「かたづ」緊迫したシーンで手に汗がにじみ出るやうに口中にたまるつばの意で、「固唾（かたづ）をのむ」ははらはら息を凝らして見守るときに用ゐる。固唾の文字面からも分かるが、カタズのズはツバのツから來てゐる。歴史的假名遣ひはだから、カタツとツを用ゐる。

「かぢ」舟をこぐのに使ふカジ（楫）も、船尾につける装置のカジ（舵）も、カジノキのカジ（梶）も、カジ屋のカジ（鍛冶）も歴史的假名遣ひは全部カヂ。鍛冶は「かなうち（金打）」が「かめち」となり、さらに『かぢ』と變化した語」と『現代国語例解辞典』に。

「かは」語中語尾にあり現代音がワで歴史的假名遣ひでもワなのはむしろ例外的で、大方はハと書く。例へば「川」。かはら（河原）・かはせみ（翡翠）・・・など。同じ音節の並びの「皮」革もカハと書く。右側・向かふ側・時計の側・・・などの「側」もやはり「かは」。

「かはい」「可愛い」は當て字で、文語の「かはゆし」からの變化である。カハユシ→カハユイ→カハイイ。『大

言海』に「顔映（は）ゆしノ略」とある。映ユシは面映ユシ、鹹映ユシのそれで、照り映えまぶしい、といふのが原義。八行四段活用出自のハではない。

「かはせ」八行四段活用動詞未然形にはワの音が現れるが、これらは「おもはず（思はず）」のやうにすべて「は」で書く。八行四段動詞と派生關係にある語、例へば「かふ（交・替）」に對する「かはす（交）」「かはる（代・替・變）」も「は」。爲替は「交はせ」の意。

「かはづ」「古池や蛙（かはづ）飛びこむ水の音」はあまりにも有名な芭蕉の句だが、カヘルをなぜカワズといふのかはあまり知られてはゐまい。カワズは歴史的假名遣ひではカハヅ。カハは川、ツは連體格助詞のツ。田のカヘルと區別した川つかヘルの下略なのである。

「かひ」「甲斐（かひ）がある・ない」と用ゐる「甲斐」は當て字。この語もやはり「交ふ」由來。物を交換・賣買することによつてある効果を得られる。「甲斐がある・ない」はその效き目があるなしをいふ語だから、假名

遣ひも「交ふ」に従ひ「かひ」と「ひ」を使ふ。

「かひがら」「貝」をカイと讀むのは音ではない。音はバイ。カイの歴史的假名遣ひは「かひ」。かつて卵や殻のこともかひといつた。『倭訓栞』に「貝はもと一物の名なるを此邦（このくに）にて甲介の類をすべて貝といへり」とある。すると、貝殻は重言のやうな語だ。

「かひこ」維學子が子供のころ育つた群馬縣には、桑畑がやたら多かつた。いま、面影をほとんどとめないので、養蠶業が日本ではもう立ち行かなくなつたからだらう。蠶は語源的には「飼い子」で「飼う」の歴史的假名遣ひは「飼ふ」。それ故、蠶も「かひこ」と書く。

「かわく」「乾く」は「かはく」でなく「かわく」と書く。「騒ぐ」と似たなりたちの語で、『岩波古語辞典』に「カワは、物のさつぱりと乾燥したさまをいう擬態語」とある。擬態語を活用させたのだ。「のどが渴く」の「渴く」も「乾く」と同源で、やはり「かわく」。

「かをり」昭和50年代に歌はれた歌に「シクラメンのかほり」といふのがあつたが、あの假名遣ひは間違ひ。「香り」「薫り」の歴史的假名遣ひはカヨリである。『大言海』は「氣折(ケヲ)るノ轉」としてゐる。この「折る」は四段活用の自動詞で、たたなわるゝ意だ。

「かんがへる」文語の八行下二段動詞は例へば、考へズ・考へタリ・考ふ・考ふるトキ・考ふれば・考へよと活用した。口語化して、考えナイ・考えマス・考える・考えるトキ・考えれば・考えよ(ろ)になつたが、活用語尾中の「え」は、歴史的假名遣ひでは「へ」。

「きいて」「聞く」「巻く」「咲く」など力行五段活用と「脱ぐ」「嗅(か)ぐ」「騒ぐ」など力行五段活用の連用形に接續助詞「て」や過去の助動詞「た」が付くと「聞きて」「聞いて」のやうになるイ音便が現れる。これらのイは歴史的假名遣ひでも「い」と書く。

「きうり」現代假名遣ひの變てこきは形容詞のウ音便同様、きうり(胡瓜・黄瓜)までキユウリと書かせること

ろにも表れてゐる。これでは音の運びからキユウ・リと理解され、ウリがウリでなくなつてしまふ。歴史的假名遣ひはキ・ウリとちやんとウリを保存してゐる。

「きえる」文語のヤ行下二段活用動詞は、例へば、消えズ・消えタリ・消ゆ・消ゆるトキ・消ゆレバ・消えよ、とその活用語尾の未然・連用・命令形に工が現れる。「消ゆ」の現代口語形は「消える」だが、これを歴史的假名遣ひで書く場合も今の假名遣ひと同形になる。

「きこえる」歴史的假名遣ひで活用語尾に工が現れるのは、文語でヤ行下二段活用だつた動詞。終止形が文語だと「くゆ」、口語だと「こえる」になる語だ。聞こえる・煮える・吠(ほ)える・甘える・生える・映える・越える・冴(さ)える・覺える・見える・凍える……。

「きづく」築地をツキチといふやうにキツクのツクはツクが濁つたもので、歴史的假名遣ひはツ。ツク(築)は突くと同根であり、「土や石を盛つて棒でついて固める」(『岩波古語辞典』)のが原義だ。キツクのキは城。元來

は地面をつき固めて城などを造る意だつた。

「きづな」現代假名遣ひの本則はキズナ。絆と書くのでやや見えにくいだが、『大言海』に「頸綱(クビツナ)ノ約」とあるやうにズナは綱なのである。ツナの假名遣ひでなければ、意味をなさない。キズナなどと書かせるから、「親子の絆を深める」などといふ誤用も現れる。

「くい」歴史的假名遣ひで語中語尾のイの音を「い」と書く例は、まづ文語のヤ行上二段に活用する動詞の未然形、連用形、命令形が擧げられる。例へば「悔ゆ」は悔いズ・悔いタリ・悔いよ。その名詞形も「悔い」と、今と同じ假名遣ひになる。「老い」「報い」も同じ。

「ください」「水を一杯ください」の「ください」は「くだりませ」の音便「くだりませ」から「ませ」が落ちた語形。だから歴史的假名遣ひでも「い」を用ゐて書く。「本を読んでください」など補助動詞の場合も同じ。「ませ」は丁寧の助動詞「ます」の命令形。

『國語問題論争史』の出版に際して

土屋 道雄

「くぢら」ジとチの發音の區別のあつた院政期にもクジラの表記が併存したとのことで、『小学館古語大辞典』によると、クジラかクヂラか假名遣ひの「決定をみていない」。しかし、『広辞苑』や『大辞林』など、一應クヂラの表記を掲げる。福田恆存もクヂラを採る。

昨年（平成十七年）一月に玉川大學出版部から出版した増補版『國語問題論争史』は、出版部の強い意欲で一部削除した部分があり、この件をめぐつてあれこれ臆測がなされ、會員の間間違つた情報が流れ誤解もあるやうなので、ここに削除した部分を明らかにしたいと思ふ。

出版を快く引受けて下さつた玉川大學出版部には深く感謝してをり、理由はともあれ、削除に應じた私にも責任があると思つてゐる。

昨年八月十八日に出版部の編輯責任者に赤字を入れた初校ゲラを渡した折、これこれの部分は言ひ過ぎだから削つて欲しいと言はれ、納得できず二時間ほど議論をした。内容についての責任は私にあり、批判は甘んじて受けますからと言つたが、どうしても削つて欲しいと言はれ、それなら、出版を見合せませうと言ひたくなつたが、出版を期待してくれてゐる人達のことを考へ我慢した。

その日は物別れとなつたが、二日後に責任者から電話があり、同じ議論を一時間近く繰返すことになつた。初校の校正を済ませた段階で出版を断念するのは残念であり、そ

真

の後の處置の煩はしさを思ひ、結局、削除したところを具體的に示して貰ひ、心ならずも出版部の求めに應じることにした。

以下、具體的に削除した部分を「」で示す。

一、「相手が非を認めてをりますのに追討をかけるのは男らしくないと申しますが……」といふ理由で、三〇六頁の三行目から、

「ところで「私は趣味・嗜好の點ではきわめて國粹的・保守的人間」で「日本語でも、舊字體・舊假名に愛著をもつ」と言ふ金田一は大勢順應派であり、御都合主義者であるやうだ。「見れる」「來れる」は「受け身や尊敬の言い方と區別できる點で、『來られる』『見られる』よりすぐれている」と言つたり、「緊張さ」「純情する」は「日本語の品詞の區別を不明確にするので、私もこれは排撃する」と言つたり、評判の悪い「送りがなのつけ方」について「何と云う矛盾だらけのきめ方だろうと思ひ、國語審議會第一の失敗作だと評價する」と書いたりしてゐる。確乎たる信念がないから、後に「福田恆存君を偲ぶ」（平成七年十二月號『This is 讀賣』）において「當時は福田君がいくら叫んでも假名遣いがもとに戻つたり、漢字が無制限に増えることはなさそうだと思つていた」が「戦後三十餘年たつてみると、驚いた。ワープロという機械が發明され普及し、

机の上でチヨコチヨコと指を動かすと、活字の三千や四千は簡単に打ち出してくれる。そうした普及につれて値段も安くなり、性能もよくなつた。新聞ぐらいは、机の上のワープロ一つで簡単に印刷できる。これなら當用漢字の制限はしなくてもよかつたし、字體でも假名遣いでも昔のままでもよかつたのだ」「偉い友人だつたと思ふこと切である」と書いてゐる。醜態には違ひないが、非を認めたがらぬ改革論者に比して潔いと言ふべきであらうか。」

二、「オビは本當に川端が書いたものかどうか？ いづれにしても宣傳の文かと、小林秀雄のものは違ふかもしれませんが、一般にオビを論評の對象にすることはないので、はと存じます」といふ理由で、三一七頁の最後の行から、
〔川端康成は「著者は三代にわたる國學の家の人」であり、あの大きい畫業の一方に、國語學者、國語愛者としても知られ〕「父祖傳來」の「魂は勿論、今日の傑れた藝術家、林武氏自身のものに生成創造され、今日の國語事情に對應しての『憂國の志』として、この著に湧出してゐる。これは切實な民族愛、傳統愛の訴への情熱の書で、萬人必讀すべきではあるまいか」と本書に推薦の辭を寄せてゐる。〕

三、「先生の『思ひ込み』のみから辭典編者を批判なさるのはいささか的是なづれかと……」といふ理由で、三四六頁の「辭典の生命は規範性にあるが」を削ることを求めら

れたが、「第六部の論旨を述べたものですから、そのままに」と断る。

四、「辭書批評及び編者批評になつてをりません」といふ理由で、三五九頁の「小堀玄奴の『不遇の人鷗外』」の前の「杉本つとむ監修の『國語辭典を讀む』」の項を全文削除する。

〔昭和五十七年三月、杉本つとむ監修の『國語辭典を讀む』が出版された。數人の學生のレポートを一冊に纏めたものだが、興味深い指摘が隨所に見られる。例へば「ふらふら」と「ぶらぶら」は出てゐるが、「ぶらぶら」は出てゐないとか、「のそのそ」と「のろのろ」はどちらも動きが遅いことを表すが、その用法の違い（「のそのそ」は生物にしか使へないが、「のろのろ」は無生物にも用ゐられる。例へば「のろのろ運轉」とは言へても「のそのそ運轉」とは言へない）についての説明がないとか、或いは「しげしげ」と「まじまじ」は意味が似てゐるが、「辭書の記述から、類似點も相違點も讀み取ることができなかつた」とか、國語辭典の缺陷を鋭く衝いてゐる。

當然のことながら、三省堂の『新明解國語辭典』の評価は低く、多くの不満が述べられてゐる。例へば「見出し語の選擇基準が不明瞭」「流行語・新造語の無批判な多用が語釋の文中に見られる」「誤用であつても世間で使われて

いるものをできるだけ認めようとし、規範性はあまり意に介してないことがわかる」「編者の主観的な見方・價值観が、また偏つたことはの把握や狭い體驗が、記述説明の上にあらわれてしまつてゐる」と言ひ、整理の仕方が「獨自的というより獨善的」であり、「あまりにナマ（未成熟）な用例と思われれるものもあつて信頼しにくい」と手厳しい。同じ系列にある、辭典の編者の言葉を借りれば「弟分」に當る『三省堂國語辭典』（昭和四十九年一月刊、第二版）にも右の批判がそのまま當嵌まる。

その不備を挙げれば、例へば「みくだりはん」の項には「三行半」といふ正しい表記が示されてゐるのに、「くだり」の項には「三件り半」とある。「とんでもない」の項に「とんでもございません」は「とんでもないことでございます」の新しい言ひ方といふ註記があり、「はっそく（發足）」の項に「ほっそく」の新しい形といふ註記があるが、新しいと言ふより「とんでもございません」は誤り、「はっそく」は一般的でないといふ註記すべきであらう。更に一般に誤りとされる「輕卒、輕舉盲動、心棒、單的、素適、巾、戰鬥」などを見出しに出してゐるから、時々見られる誤字誤用の類をすべて認める方針なのかと思へば、出納を「しゅつつう」、漸次を「ざんじ」と讀むのは誤り、御他聞を「御多聞」、固有を「個有」と書くのは誤りとしてをり、甚だ無定見で

ある。

どうしてさうなるのか。同辞典の主幹である見坊豪紀は『辭書をつくる』（昭和五十一年十一月刊）の中で「私にとって辭書とは、かがみである」「上品な形も上品でない形も、正しい意味も正しくない意味も、それが客観的にはつきり存在すると認められたとき、どちらも公平な取り扱いを受ける。正しくない方を切り捨てることによつて編者の見識を示すことはしない」と述べてゐる。が、「編者の見識」を示すことなく辭典が作れるのか。うつかりとか、勘違ひとか、無知とかによる誤字・誤用が二、三回新聞や雜誌に出てゐるからといつて、「客観的にはつきり存在する」として「見識」を示さず、どんどん辭典に載せられては堪らない。辭典が手本となる「鑑」ではなく、單に形を映す「鏡」では安心して使へまい。それでは辭典の規範性は失はれる。新語を一つ辭典に加へるにも慎重でなければならぬのに、一出版社の一編者の恣意のままに扱はれては困る。ただでさへ言葉は崩れがちであり、誤用は擴散しがちである。それに辛うじて齒止めをかけてゐるのが辭典ではないか。それなのに、辭典が言葉の亂れや誤用をすぐ認めしてしまつては、日本語の低俗化と誤用の普及に力を貸すことにならう。」

五、「恐らく教科書の文章を柴田先生がチェックされる

ことはなかつたかと存じます。教科書編集はさういふものかと……」といふ理由から、三六六頁の九行目から、

〔柴田が監修してゐる教科書『中學國語一』では「民衆は、生活經驗の積み重ねの中から、人生の眞實や知恵を掘り出す。それが、口調のよい、簡潔な言葉に結晶したのが「ことわざ」である。……ことわざは多かれ少なかれ訓の味がある。生な訓を打ち出すよりも、……巧みな比喻をきかせたものが多い」と説明されてゐる。柴田の御都合主義には呆れる外ない。〕（以下は部分削除）

また〔同教科書には〕外來語について「しかし、『リツチでゴージャスな気分』と言つたりする傾向に對しては、いましめる聲が高いのも當然のことでしょう」とまともなことが書かれてゐるが、座談會の柴田は「いまや外來語は『新漢語』ですらあります」「これだけ國際交流が激しくなると、もう譯してはいられない。量も多いし、文化のスピードが速い」と述べてゐる。「學者として無節操と言ふべきか、無自覺と言ふべきか、批評すべき言葉がない。」更に「青春する」「便利ませう」のやうな何にでも「する」をつける言ひ方について、見坊は「やつてるな、新しい例がまた増えた、と受けとるだけ」と言ひ、柴田は「日本語の可能性をこういうところに伸ばさうという欲求があるのだな、オモシロイな、と見ている」と言つてゐるが、「今

問題にされてゐる學校における「いぢめ」を「やつてるな」とか、さういふ「欲求があるのだな、オモシロいな」と見ている態度と大差ないではないか。」誤字や宛字、間違つた言葉や言ひ回しに甚だ寛容であり、物解りのよいことを言ふ學者が多い。知識は確かに豊かであり、「知」においては申し分ない。しかし、日本語を愛する「情」において、また正しい日本語、美しい日本語を何としても守らうといふ「意」において、全く異邦人と變らない。「なまじ知識があるために、却つて異邦人より始末が悪い。」

六、「論争史」と無關係かと?」といふ理由から、三七〇頁の十行目から、

「現代假名遣い」より歴史的假名遣の方が合理的であることは多くの識者が指摘してゐるところだが、市川浩が開発した歴史的假名遣で文章入力できるコンピュータ・ソフト「契沖」がそれを證明してゐる。これは「現代假名遣い」にも對應でき、「現代假名遣い」で打鍵しても正しい歴史の假名遣に變換してくれるから、これがあれば誰でも容易に歴史的假名遣で文章が書ける便利なソフトである。」

七、「戲言」のルビにつき「逸先生の文章に右の間違ひがあります。ここで直したとしても『文春』の方は間違ひですから、この一文削除?」といふ理由で、四〇四頁の十行目から、

「なほ、百十六名中、正しい歴史的假名遣で書いてゐるのは桶谷秀昭と福田逸の二人に過ぎなかつた。ここに記して見識に敬意を表する。」

八、「なぜこんな書き方をなさるのか、悲しくなります」といふ理由で、四〇九頁の十六行目の「戦後甘い汁を吸つた人達」を「戦後の改革を推進してきた人達」に改める。

九、「論争史」と無關係」といふ理由で、四一頁の「高池勝彦と松岡隆範の信念」の項の全文削除を求められたが、「實踐してゐる人を私は高く評價してをり、かくあるべきだと思つてをります。ここはこのままにお願い致します」と断る。

十、「私は、随分以前ですが、竹山道雄先生が『聲』の投書と論争を強ひられたとき以来、このやうな『感想』を眞面目に取上げられることに違和感をもちます」といふ理由で、四一三頁の十四行目から、

「學者も文人も官僚も報道關係者も頼りにならない中で、讀賣新聞(平成十六年四月十六日)の「氣流」に掲載された、主婦の岡佳子の「正しい日本語を身につけて」には大いに勇氣づけられた。岡は「最近テレビを見ていて、誤つた発音や敬語など、日本語の亂れが氣になっています」「英語よりはるかに表現が豊富な言葉を話せる私たち日本人は、日本の文化を學ぶとともに、まず正しい言葉を話すべきで

はないでしょうか。自分の思いも適切に表現できない子供が増えています。まず、基礎となる日本語を身につけてから、英語での表現を學んでほしいと思います」と訴へてゐる。]

十一、「かういふことを例へば柳瀬尚紀さんが仰言つたなら、私も納得します」といふ理由で、四一四頁の最後の一項を削除する。

〔一、國語辭典の数は選擇に困るほど多いが、質は決して高くない。出版社の營利に委ねられてゐるために、新しさを競ひ拙速に流れがちである。テレビが視聽率を上げんがために質の低下を顧みないのと同じ現象が辭典にも見られる。辭典の生命は規範性にあるが、その規範性が失はれつつある。ただでさへ言葉は崩れがちであり、誤用は擴散しがちである。それに歯止めをかけるのが辭典の役目である。〕

尙、新潮社版が福田恆存先生の名前であるのに、今回の増補版が私個人の名前になつてゐることに不審を抱く方もをられるやうなので、一言説明しておきます。新潮社版の最後の「今後の問題」は私が書いたものを福田先生が二倍くらゐに書き直されました。それと「後書」は先生が書かれました。そこで今回増補版を出版するに當り、先生の奥

様に手紙で「著者名を先生と私の共著としたものか、私人の名前にしたものか、奥様のお氣持に従ひたいと思ひます」とお尋ねしましたところ、二日後に電話で「土屋さんのお名前ですらよろしいと思ひます。生前主人もそのやうなことを申してをりましたし、私もさう思ひます。主人もきつと喜んでゐると思ひます」といふことでしたので、私一人の名前で出版することにしました。また増補版をお送りしましたら、奥様から「あの御本がこんなに立派な形で甦りましたこと泉下でもきつと喜んで居ります事と存じ、早速佛壇に供へました。今後どうぞよいお仕事をお重ね下さいますやう念じ居ります」といふお葉書を頂戴し大變嬉しく思ひました。

(つちやみちを・評論家・本會名譽會員)

「横たふ」をめぐる

齋藤 恭一

荒海や佐渡に横たふあまの川

この著名な俳句は、天の川が佐渡ヶ島に横たはつてゐる

意ゆゑ、他動詞「横たふ」は文法上破格である。しかし諸

家が芭蕉の名譽のためにいろんな説を拈出してゐる。加藤

楸邨氏はそれらをまとめて、『横たふ』は八行下二段活用

の他動詞であるため、古來文法上問題とされている。『横

たはる』とあるべきを強めていったものだとか、天の川が

自らを横たえる意でいったものだとか、『横たふ』に自動

詞的用法があつたのだとか、諸説が行なわれている。』と。

廣辭苑に「(自動詞として)『横たわる』に同じ」とし、こ

の句を例に擧げてゐるが、結論だけで説明がない(少くとも

近世のまともな作物をあさつて、『横たふ』の自動詞的

用法を例證するのが學者の良心であらう)。注参照。しか

もこの不得要領的な説が通説化してゐるのである。萬葉

集の昔から、自動詞と他動詞とのわいだめはつきりさせ

て來てゐる。イエズス會のバテレンたちが、布教のため

に必須なる日本語の字書を作つた。日葡辭書といふ。そ

こに「Yocotaye, uru, eta (横たへ、ゆる、へた)」の他動

詞、Yocotauari, ru, atia (横たはり、る、つた)」の自動

詞の、活用形と語義とが記されてゐる。日葡辭書は慶長八

年(1603)刊行である。無論、芭蕉は動詞の自他の區

別を(誰よりもよく)知つてゐた。知つてゐて故意に「横

たふ」を使つた。「横たはる」であるべき所に「横たふ」

を使つたもう一例がある。

ほととぎす
郭公聲横たふや水の上 (藤の實)

そもそも俳諧が長連哥・短連哥の形式を捨てて、俳諧の

發句を獨立させて「俳句」といふ一つのジャンルを志向す

れば、僅々十七文字に深い詩想を盛りこむのはどだい至難

のわざであらう。季吟の門から出、談林に熱中した芭蕉は、

破格の形式とイメージの突飛な連想をここで身につける。

この阿蘭陀流から別れて一家をなしてもその餘韻は残る。

詩想を何とか十七文字に押し込めるために、ことばを、こ

とばのきまりをその極限まで徹底的に追ひ詰めた。

荒海や佐渡に横たふ天の川

聴く者はハツとする。あるまじき「横たふ」に抵抗を感ずる。しかも深い感銘を受ける。「横たふ」が句の核なのだ。「郭公聲横たふや水の上」の場合も同様。「聲横たふ」といふ前代未聞の措辭は、不合理を壓して非合理にしてしまふ。もう一例、「他動詞を誤用した」文を引かう。「おくのほそ道」中、あれほど愛慕してゐた松嶋では句を作らず名文をものした。句では松嶋の美を表現しえぬからである。その文中に

松のこまやかに、枝葉汐風に吹きたはめて、屈曲おのづからためたるがごとし。

「たはむ」即ち「たわむ」は、四段の時は自動詞、下二段の時は他動詞である。「たはめ」は下二段の連用形である。「吹きたわみて」とあれば、美文を快く辿つてゆけるが、「吹きたはめて」にぶつかるゝとハツとしてこれと思ふ。「吹きたわみ」は、弱く、「吹きたはめ」は勁い。實際は「枝葉」が「汐風」に吹きたわめられて、だが。しかし芭蕉にとつて直觀的に「吹きたはめて」でなければならなかつた。かかる破格の上のあやふい結晶美をば、慥かに芭蕉は狙つてゐたのである。

またかかる措辭は、禪の覺知から來たのかもしれない。禪では自他の區別はせぬ、否、自他は一如である。さうとすれば、芭蕉は文藝を超えた文藝を志向したのかもしれない。

注 かつて金田一京助氏は、この「横たふ」をうべなふ理由として、芭蕉ほどの大文學者の用法だから、語法上は誤りではあるが、もはや誤りとはいへまい、と學者としては最底の言を弄してゐた。（この文章の掲載書は忘失した）

（さいとう きょういち・元埼玉縣立高校國語科教諭）



聖書に於ける國語問題（その四）

——ヘボンの言語觀——

松岡 隆範

前回は人稱代名詞の問題を扱ひ、更に論ずる豫定であつたが、それを變更し、聖書和譯に當つてのヘボンの言語觀、基本方針に就て先に述べる事とする。

ヘボンは語學力に優れ、かつ明確な言語觀を持つてゐた人であつた。

安政六年（一八五九）に來日したヘボンは、本格的な聖書翻譯事業に入る前に先づ「和英語林集成」といふ秀れた辭書を作つてゐる。此れは和英辭書であると同時に卷末にある英和インデックスにより英和としても使ふ事の出来るものである。日本では活字印刷が出来ないので上海の長老派教會印刷所で千二百部を印刷し、慶應三年（一八六七）に横濱から發行した。

此の印刷の爲に新しく國字、片假名、平假名、變體假名の活字を上海で作つたのである。

又假名遣も字音假名遣も歴史的用法に従つてゐる。此の辭書は今日見ても優れたもので來日して八年にしてこれだ

けの辭書を作り得た事は、ヘボンの語學力の高さを示すものである。

私は此の辭書の初版（慶應三年）と第三版（明治十九年）の覆刻本を日常よく參看するのであるが、聖書の譯語を調べる時、此の辭書の初版に當つて見る事も必要である。

次にヘボンは假名文字主義者でもなく、漢字制限論者でもなく口語主義者でもなかつた。

聖書和譯の文章は教養のある侍階級の人達にとつて讀むに堪へる文章でなければならぬと考へて初めから文語體を採つた。

宗教の正典であり、禮拜、典禮に用ゐられる文章としての格調を必要とすると考へて、始めから平易通俗の口語文を採らなかつたのである。

漢譯聖書を所持しそれを讀む能力のあつたヘボンは漢譯聖書からも多くの語を採入れてゐる。我、爾、彼、の人稱代名詞だけではない。

漢文では外國の人名や地名も漢字の音だけを借りた宛字を用ゐる。そのままでは地の文との區別がつかないので人名には一本の傍線、地名には二本の傍線を引いて區別するのであるが、此れを便利として和譯にも採入れてゐる。

マルコ傳一章から例を示さう。

約翰在野施洗、傳悔改之洗禮俾得罪赦。舉猶太地耶路撒

冷人出就之各言己罪、在約但河、受洗於約翰。

(漢譯聖書より)

ヨハネ野に於てバプテスマを施し罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳たり。コタヤの全國およびエルサレムの人々かれに來りて各々その罪を認はしヨルダンといふ河にてバプテスマを受

(明治元譯より)

へボンが欽定英譯聖書に深く學んでゐる事に就ては前回にも述べた。

ウイリアム・ティンダルの譯に大きく基づいてゐる欽定英譯聖書の簡潔雄勁な文章は古今の名文として尊重されてゐるが、へボンが特に學んでゐるのはティンダルが採つたアングロ・サクソン語第一主義なのである。ティンダルはギリシヤ語系、ラテン語系の語、即ち英語に於る漢語の使用をなるべく控へて能ふ限り本來のアングロ・サクソン語を使ふといふ方針で聖書の英譯をしたのである。

それに深く共感してゐたへボンは同じ事を日本語譯に於てやりたかつたのである。

漢字、漢字熟語を多用しながらそれらを總べて大和言葉で讀むといふ和訓主義をとつたのである。

復活と書いてヨミガヘリと讀ませ

靈魂と書いてタマシヒと讀ませ

眞實と書いてマコトと讀ませ

誠命をイマシメ

過失はアヤマチ

贖主をアガナヒヌシ

思念をオモヒ

異邦人をコトクニビト

憐憫をアハレミ

勇士をマスラヲ

嗣子をヨツギ

相續人をアトツギ

穹蒼をオホゾラ

新郎をニヒムコ

證詞をアカシ

眼をマナコ

臂をカヒナ

純精金と書いて

マジリナキコガネ

至高神と書いて

イトタカキカミ

謙卑と書いて

ヘリクダリ

祝福みたまへを

メグミタマヘ

切りが無いからこれでやめる。

これでもかこれでもかといふ程一徹な和語への打込み様は方針といふよりは執念といつてもよい。

そして總ての漢字にルビを振るのである。

漢字の多用を嫌ひ平易な假名書にする事を主張する他の英米人宣教師の翻譯協力者に對して、へボンは「假名書きの部分で以て本文とする」といふ條件を出して納得させてゐる。假名書の部分とは勿論ルビを含んでゐる。これは納得させるといふよりは、なだめて懐柔したと云ふべきであ

らう。即ち漢字多用を嫌ふ宣教師達が漢字を減らした版を出したとしてもヘボンの和訓主義による本文は動かないからである。

かうしてあの新鮮で獨自な文語體が生れたのである。ヘボンの言語觀は實に意識的で強烈なものでそれを執念を以ておし通したのである。

ヘボンは來日して、日本に既に漢譯聖書が多く將來されてゐて侍階級は漢譯で聖書を読んでゐる事を知つた時、聖書の翻譯事業として漢文訓下し文を作るのが最も手取り早いと氣がついて、日本の侍達を助手として訓下し文を作らせるのであるが此れをある處で中止してしまふ。ヘボンが理想としてゐる様な日本語らしい日本語にならないと感じたからである。何としてもウイリアム・ティンダル流でやりたいといふ願ひがあつたからである。

ヘボンにはギリシャ語、ヘブライ語の原典以外に二つの規範とすべきものが有つた。欽定英譯聖書と漢譯聖書である。規範を持ち得た人は幸ひである。

ヘボン自らはティンダルに就ても、そのアングロ・サクソン語主義に就ても何も語つてはゐない。然しヘボンの文語譯と欽定英譯聖書と漢譯聖書の三つを突合せて讀んで見るとヘボンがどの様な言語觀を持つてゐたかをうかがひ知

る事が出来るのである。

欽定英譯聖書の英語は十六世紀の英語である。

千五百年以降の英語を近代英語とするのが英語史の定説であり、讀解に困難はないが、今日の英米人にとつては古風な文語文である。

欽定英譯に傾倒したヘボンが和譯に當つて初めから文語體を採つたのは極く自然だつたのではなからうか。

私は舊新約全書（引照付）の明治元譯版（大英國聖書會社による神戸發行）を説教壇用の大型の美本で持つてゐるので新約聖書の部分も元譯^{モトヤク}で讀む事が出来る。

現在日本聖書協會から發行されてゐる文語譯は、新約聖書の部分が大正時代の改譯である。然し舊約聖書の方は明治元譯^{モトヤク}のまゝであるから、ヘボンの和訓主義と漢字の用法を調べたい人は舊約聖書の方を讀まれるが良いであらう。

自分自身の言語觀が確立してゐなければ筋の通つた立派な文章は書けない。ヘボンが何故あれだけの日本語文を書く事が出来たのかと考へて、そのよつてきたる處を推しはかつて見たのである。

（平成十八年二月）

（まつをかたかのり・彫刻家・元造幣局工藝管理官・本會常任理事）

國語問題協議會に入會して

大谷眞智子

それまで國語にふかい興味がある譯ではありませんでしたが、御縁があつて、數年前に協議會に入會させていただきました。入會するまでは、「歴史的假名遣ひ」は古典の中で讀むもので、戦後教育を受けた私たちは、「現代假名遣い」を使ふのは當然で、そのことに何の疑問も持つてをりませんでした。私は團塊の世代で、すでに少し墓がたつてゐましたが、外國の航空會社でルンロンと飛んでゐたのです。

ところが、入會時に頂いた「葉」や「國語國字」、協議會のホームページなどを見るやうになり、初めて敗戦の占領政策の際に、文部省が以前から國語改革を唱へてゐた人々の言ふなりに、根據らしい根據もなく歴史的假名遣ひを強制的に「現代假名遣い」に変更したと知り、大變驚きました。今年の五月だったか、「ゆとり教育」について、一人の中學生から「ゆとり教育を受けた私たちは、他の年代の人たちよりもずっと知識が少ないのですね」といふ質問を受け、中山文部科學大臣がゆとり教育の罪科を認め、

その中學生に謝罪したといふ新聞記事がありました。つまり小學生のみならず、中學生、高校生のあまりの學力低下に多くの人々がやうやく氣がつき、文部科學省もゆとり教育の弊害を認めざるを得なくなりました。そして、戦後教育を受けた私たちも、國語教育に關して言へば、「ゆとり教育？」を受けた被害者だといふことに氣がつかしました。なんとといふことでせう！漢字が難しからうから易しくしてあげませう、漢字の數もあなたの頭ではそんなに多く覚えられないだらうから少なくしてあげませう、假名遣ひも難しいだらうから（實際は「現代假名遣い」のはうに矛盾が多いし、文法的にめちやくちや）、發音に近くしてあげますよ。餘計なお世話ちや！

戦後、文部省の行つた國語破壊には怒りがこみ上げてきました。同時に、戦後の混亂に紛れて、この時とばかり、國語改惡をけしかけた國語學者には一層の怒りを覺えます。金田一京助と言へばアイヌ語の研究で有名で、小學生にとつては尊敬の對象でした。學校推薦の國語辭書は「きんだいち先生著」でした。たしか小豆色の辭書で、見出しが發音どほりになつてゐて、子供心にも何となく違和感がありました。

そのすばらしい大先生が、なんと國語破壊を強力に推進した人物の一人だったとは！小學生には知る由もなく、

協議會に入會するまでは全く知らなかつたことです。大變なショックでした。その子息の春彦氏も父君京助氏の國語改革の後繼者だつたとは！小學校でも習ふので、「きんだいち」と言へば日本全國でたぶん知らない人はゐないくらゐのスーパー有名人でせう。幸か不幸か、探偵金田一耕助も有名だし、この事が更に「きんだいち」が世間の人々に知らず識らずに、正義の味方のイメージとしてインプットされ、増幅されたのではないかと思ひます。少なくとも私の「きんだいち」感覺はさうです。

さて、入會後、歴史的假名遣ひを勉強し、間違へながらもこの假名遣ひが暮しの一部となりはじめました。そして、一緒に國語の復権活動しようと思つた友人たちを誘つてきましたが、しかし、今のところ友人たちの反應は鈍いままです。

昨年、私の住む團地の自治會で報告文書を提出したとき（私は會長を努めてをりました）、四十代の廣報擔當者が印刷前に「現代仮名遣ひに直すといふ樁事が起きました。「あなたはご存じないかも知れませんが、歴史的假名遣ひは正しい國語表記なのです。文章は人の精神なのですから元に戻して下さい」と、私は申入れたのです。知らないがゆゑにいと簡単に他人の文章を直してしまつたのです。この擔當の方はすぐ叮嚀な詔狀を送つてこられ、私の報告は無事に元の形で印刷されました。自治會の總會で、歴史的

假名遣ひの私の文章を問題にする方は一人もゐませんでした。むしろ、「歴史的假名遣ひで書かれたものは品格がありますね」と、言つて下さる方もあつたのです。しかし、單なる個人の趣味だと見る人もあつたと思ひます。

「趣味」といふ言葉が出ましたので、趣味のことも一言。協議會入會とほぼ同じ頃、俳諧連歌（連句）の樂しみを知りました。日本連句協會會員は約千人と聞いてゐます。定年退職した人など高齢の方が多くやうです。連句を巻く（座を組んで連句をすること）を「連句を巻く」といふ時に、歴史的假名遣ひを使つて巻くこともあるのですが、「現代仮名遣ひ」に較べると少ないやうに見受けられました。日常生活で使つてゐる人はどのくらゐか分かりません。或る時、ベテランの先輩Ｔさんに、連句を巻く時には歴史的假名遣ひを使つた方が素敵だと思ふがどうして少ないのですか？とたづねると、完璧に使ひこなせないから私も使はないといふのです。Ｔさんは師匠級の實力があるばかりか、日本の文化に造詣が深い方なのに残念に思ひました。Ｔさんのやうに七十代前半の方は、小學生の時に歴史的假名遣ひで教育を受けた年代だと思ふのですが、今更變更するのには面倒なのでせうか。

「現代仮名遣ひ」から「歴史的假名遣ひ」へ切り換へるには、中途半端に歴史的假名遣ひで教育を受けた年代より

も、若い世代のほうが柔軟性があるかもしれません。協議会には二十代ですが、獨學で歴史的假名遣ひを學び、學生時代から實踐してをられる方もゐます。私の個人的な友人 A さんも二十代ですが、正假名を實踐してゐます。福田恆存先生の『私の國語教室』で學んだとのことで、若い方でも世の中には分る人はゐるのです。

以前の職場では英語やドイツ語を使つてをりました。今は英語を少々使つてをりますが、學校で習つた時、英語もドイツ語も發音と綴はちがふので皆覺えるのに苦勞しました。違ふのにはそれなりの理由があるので、かの國の人々は綴を變へようとはしません。自分の母國語である國語を、綴を全部發音どほりにするやう強制するなんて、なんて愚かなのでせう！外國語を學ぶ時は發音と綴の違ひも一生懸命勉強するのに。

外國人にとつては日本語は興味深いやうです。フライト中のことでしたが、トランプ大の漢字カードを使つて正漢字！の勉強をしてゐる人がゐました。EUの六十代の外交官で、たしかベルギー人でした。漢字カードは先任者のお下りだとのこと。また、ある時は、分厚い漢字辭書を三冊も持ちこんで漢字の勉強をしてゐる若者がゐました。こちらはドイツ人でした。その辭書は石井勳先生の日本漢

字教育振興協會の物ではなかつたので、彼に石井式漢字學習についての情報を教へてあげました。外國滞在先では、ホテルのプールサイドで英語版「葉隠」をのんびり讀んだり、合間に日本語の勉強をしてゐるドイツ人もをりました。ドイツ語の自分の名前を漢字で書いてほしい、と頼まれたことが何度ありました。發音に近い漢字を、それもできるだけ美しい漢字を探して書いてあげ、いつも大喜びされました。外國人にとつて漢字はあこがれのやうです。私の名前は「眞智子」ですが、それぞれの漢字の意味はどういふ意味なのかと、ドイツ人の同僚たちから尋ねられたことは數へきれないほどあります。たいへんうつくしくかしこい女性の意味であることを解説してあげましたら、みな怪訝さうにしてゐましたが……。

漢字は偏や旁など、なりたちから學べば、覚えやすいと思ひます。外國人はことに漢字や國語文法を理屈で學びますから、假名も文法がきちんとしてゐる歴史的假名遣ひの方がずっと覚えやすいでせう。日本語を學びたい外國人にはまづ、文法が正しい歴史的假名遣ひを教へた方がよいと思ひます。

ところで私は、昨年、再就職の際の受験と面接で次のやうな経験をしました。まづ、書類審査では履歷書と職務經

歴書の提出がありました。ハローワークでは、書類の書き方の指導がありました。歴史的假名遣ひで書かれた私の書類を見て、擔當官は最初顔がピクピク。なんぢやこりゃ？しかし、私に「現代仮名遣い」に直すつもりがないことを知ると、これで應募してみてもよいでせうと諦めました。そして書類應募し、まづは第一の關門の書類審査にはパスしました。筆記試験も歴史的假名遣ひで通しましたが、これもパスでした。

更に、五人の役員による面接がありました。幾つかの質問の後、次のやうな質問がありました。「大谷さんは舊假名遣ひにこだはりがあるやうですが……」待つてました皆の衆！（古いわね！）と、面接の場ではありましたが、私は生意氣にも「戦後の文部省の國語政策の間違ひ、戦争に負けたがゆゑの占領政策によつて國語が破壊されてしまつたこと、小さい團體であるが破壊された國語を戦前のものに戻す運動をしてゐる國語問題協議會といふところで、少しお手傳ひをしてゐること、國語こそ日本人の基本である」と演説をしてしまひました。これで、試験に落ちるかなあとちょっと心配もありました。面接者は呆氣にとられたのか、だまつて聞いてくださいました。後で知つたのですが、この會社は外國文化への關心も大きいですが、同じやうに日本の文化も大切にしようとしてゐるやうです。結

果は合格でした。私の口角の泡が見えたのでせうか？健康優良兒だからでせうか？それとも美貌ゆゑでせうか、志望者三十三名の中から一人の採用でした。

會社は二十代、三十代の若い社員が多いのですが、歴史的假名遣ひや正漢字に興味を持つてゐる人がゐるのには意外な感じがしました。人事部に書類を送付した際の「都筑區」、「港區」の「區」の字に好意的な興味をもたれました。また或人は、「歴史的假名遣ひは自分では使へないけど、秀圍氣がいい、情緒がある」と、言つてくれたり、實際に使はなくても興味があるやうです。毎日、一日の終りに業務日誌を本社にファックスするのですが、歴史的假名遣ひで書いてをります。時には社長も讀むことがあるとのことで、ガゼン張り切つてしまひます。まだ全ての文書とまではまゐりませんが、歴史的假名遣ひで仕事が出来るとはあはせを感じてをります。

（おぼたにまちこ・本會參事・元ルフトハンザドイツ航空乗務員）

和歌

不破淑子

古き手帖より

島に散りし英靈よび給ふか 初旅の

機はゆれやまずアリユーシヤンの空

英吉利の友に

赫々と日輪沈む西の涯

君はまさきく學びいますや

八十路の晩夏

残る日を麗しく生きん逝く夏の

青空に浮ぶ雲に誓ひぬ

上山 忠男

戦中戦後、九年間闘病の父の看護。醫療保障なき時代、財産

處分しての治療費捻出と子育ての苦勞に對し、佛前にて焼香

せし折詠める歌（平成十八年四月十日 母祥月命日）

後家となり齒を喰ひ縛り耐へ忍び

愛しき四兒に全てを盡す

斜陽なる家を興されこの日あり

安らぎ賜へたらちねのはは

安東乃路翠

熊野の新春 那智の瀧を詠むて

天地の 神を祀りし 山の嶺の 新し幣に 風は清しき

春の野

何時かしら 笑ふが如と 語らへば 春野に少さき その花

摘めり

香椎の宮の浦へ

海原に 新し年の百千舟 行き交ふ御崎 神代もかくに

松岡隆範

五十年を経て

君とただ二人して斑鳩の傳法堂に倚りゐしことあり

わが心かはらざれども年月を隔つる君となりにけるかも

第一回 國語かなづかひ講習會 主催 正かなづかひの會
(平成十八年五月十三日 於日本俱樂部)

講習一 五十音圖とかなづかひ

上村 知己

日本語を假名で表記する際の決りを「假名遣」と申します。私たちの國語は漢字假名交りで表記しますが、其の中の假名を用いた部分を正しく綴らうといふのがこの講習會の目的であります。

歴史的假名遣(以下「正かなづかひ」と稱す)で表記される文章は「古典」「文語」などの専門的で特殊な表記だ、といふやうな誤解がありますが、戦前は社會一般で普通に使はれてゐたものです。そのほんの一例として、參考資料に昭和五年發行の『商店界』といふ雑誌から「電話の掛け方受け方常識」といふ文章を掲げました。名文でも何でもありません。我々が書く極く普通の文章です。ですから正かなづかひは日本語を書く我々が、今日、日常生活に於て今すぐにも使へるものなのだといふことをまづ始めに申上げておきたいと思ひます。

それを習得するためには、「かなづかひは五十音圖の秩

序に従ふ」といふことをはつきりと理解しておく必要があります。本日は、正かなづかひの習得法をどうかう言ふよりも、日本語のかなづかひが五十音圖に體系づけられてゐる、その様子を説明申上げたいと思ひます。このことは逆に、今の「現代かなづかひ」が如何に五十音圖で表される言葉の表記法則を無視したものであるか、といふことの證明にもなります。

改めて申上げるまでもないことですが、五十音圖は表に掲げましたとほり、縦の五段と横の十行、5×10で五十音。現在、國語辭典や教科書に掲載される五十音圖の多くは、ア行假名と重複するヤ行ワ行内の三箇所について空白もしくは括弧が施してありますが、正かなづかひではこの段と行による穴空き無しの完全五十音圖に従つて綴りますので、穴を空けるわけにはまみりません。

ワ行内の語で使用頻度の非常に高い「ある」「をる」、それに列を用ゐる語をまづ紹介致します。

ある(居る) — 「くしてゐる」
をる(居る) — 「くしてをります」
ゆゑ(故) — 「くのゆゑに」

ゑ (繪) — 「描く」
 ゑみ (笑) — 「微笑む」

ゐとゑ (片假名は牛、エ) は「現代かなづかい」では全く使はれませんが、これを機に早速今日から手紙、Eメールなどで使つてみて下さい。

ア段イ段ウ段エ段オ段

ア行	あ	い	う	え	お
カ行	か	き	く	け	こ
サ行	さ	し	す	せ	そ
タ行	た	ち	つ	て	と
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ行	ま	み	む	め	も
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ラ行	ら	り	る	れ	ろ
ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を

さて、かなづかひが五十音圖に従ふとは具體的にどういふことか。まづはじめに、(表一)を御覽下さい。

(表一) 同一語の別形は五十音圖の同一行内で對應する。

あめ (雨) — あまがさ (雨傘) — あまぐも (雨雲)

おちる (落) — おとす

でる (出) — だす

まじる (混る) — まぜる

はぜる (爆) — はじく (弾)

それぞれ○印を附けた箇所注意して頂きたいのですが、「あめ—あまがさ/あまぐも」の場合は「め—ま」でマ行内で對應してゐます。以下同様に「ち—と」でタ行、「で—だ」でダ行、「じ—ぜ」はザ行で對應してゐます。(濁音箇所もサ行、タ行と清音に讀換へても構ひません。後で述べますが、清音と濁音もはつきりと對應します。)

これらは別に「現代かなづかい」とちつともかはりませんが、次の(表二)はどうでせうか。五十音圖と見較べて正かなづかひと「現代かなづかい」との相違點を確認してみませう。(○印は「正かなづかひ」、×印は「現代かなづかい」)

わななき (戦・慄) —— をのき

(表二) 正かなづかひでは同一行内で對應する箇所が、「現代かなづかい」では行を跨いでしまふ。

くではない —— くぢやない

×くぢやない

うへ(上) —— うはぎ(上着)

うはずる「聲がうはずる」

×うえ

—— ×うわぎ

あやふい(危) —— あやぶむ「完成があやぶまれる」

×あやうい

はは(母) —— ばば(婆)「おばあさん」

ちち(父) —— ぢぢ(爺)

「おぢいさん」×おじいさん

「おやぢ」×おやじ

こゑ(聲) —— こわいろ(聲色)×こえ

こわだか(聲高)

こわね(聲音)

すゑる(据)「置物を据ゑる」—— すわる(座)

「いしすゑ(礎)」

うゑる(植) —— うわる「庭に梅の木が植わつてゐる」

順番に見ていきませう。「くではない」をつづめて「くぢやない」と言ふとき、「現代かな」では「じやない」と表記する爲、同じ語の別形がダ行とザ行とに跨がつてしまひます。次に「うへ(上)」とあります。これが「うはぎ(上着)」「うはずる」などと形を變へた場合、同じハ行内で無理なく變形してをりますが、現代かなでは「上」が「うえ」になり、別形は「うわぎ」「うわする」で、これまたえ、わでア行とワ行とに跨がり兩語間の關聯性が斷たれてゐます。次の「あやふい—あやぶむ」は先程申しました清音と濁音との對應例です。「現代かな」の「あやうい—あやぶむ」に較べてその兩語間の關係が明瞭にみてとれることとせう。そのもつと單純な例が次の「はは(母)—ばば(婆)」です。これは「ちち(父)—ぢぢ(爺)」の對應例を導き出すために傍證として出したのですが、「現代かなづかい」のやうに「爺」を「じじ」としてしまつては、父母に皺が寄り爺婆と成る、といふ明證性が薄れます。アンチ・エイヂングのつもりでせうか。

ワ行の對應例、「こゑ」「すゑる」「うゑる」「わななき—

をのき」も「かなづかひ」の原則どほり同一行内できちんと落着いてをります。ゑも隨分使ふことが分かりますし、

すわる(座)―すゑる(据)などの関係も、五十音圖の秩序のもと、「自動詞―他動詞」の間柄であることに氣附かされます。(餘談ですが、英語の「sit―set」、ドイツ語の「sitzen―setzen」の對應と不思議にも東西軌を一にしてをり、面白いものだと思います。)この「すゑる」「うゑる」などは、文語の終止形においては「すう」「うう」となります。注意すべきは語末の「う」はア行の「う」ではなく、ワ行の「う」であることです。五十音圖と矛盾しません。

これらの例から、一つの言葉の表記を變へてしまふと、その言葉と密接な關係を有する別の形との聯絡がつかなくなる、といふことが御理解いただけたと思ひます。正かなづかひは、(表二)の最初に擧げた「ではない」と「ぢやない」との對應例でも分かるやうに、耳で聞いた分にはかなり違つたふうに聞える言葉でも、その「ではない」が「ぢやない」に省略されたといふ痕跡を「目に見える」形に、つまり表記に残さうとするのです。對して「現代かなづかい」は一つ一つの言葉が孤立してゐて、關係があるものを無理に引き離してゐることがよく分かると思ひます。言葉の表記としては随分亂暴なやり方ですね。

次に(表三)のヤ行の對應例に移ります。

今の國語教科書や大方の現代國語辭典では、ヤ行の「い」「え」が空白になつてゐたり括弧がついてゐたりして、まるでヤ行の「い」「え」が言葉として機能してゐないやうに扱はれてゐますが、それは「かな」を、音を寫すだけのものとしか考へないため、ア行と重複する「い」「え」(もしくは前出のワ行の「う」は繼子^{まねこ}扱ひされてゐるのです)かなづかひは、つまり綴り(spelling)といふものは音を表すと同時に言葉の意味や文法をも表現するのですから、五十音圖からこのヤ行の「い」「え」を外す譯にはまゐりません。

(表三) ヤ行内の對應例。

ふえる(増)	ふやす
たえる(絶)	たやす
もえる(燃)	もやす
ひえる(冷)	ひやす
こえる(肥)	こやす

「畑に肥やしをやる」

(表三)のこの例は、表記上は「現代かなづかい」と同じですが、「現代かなづかい」ではこれら上段の「え」をア行とみなしてゐます。しかしそれは間違で、下段のやう

に語形を換へたり（これらは先程の「自動詞―他動詞」の關係です）、文語「絶ゆ」「燃ゆ」などに置換へてみるとヤ行の「え」であることがはつきり致します。

ヤ行の「い」も實はちやんと機能してをります。それは文語「悔ゆ」「報ゆ」に對しての「悔いる」「報いる」がさうですし、

いく(行)――ゆく(行)

この「行く」の兩形は、既に奈良時代から併用されてゐたさうですが、かういふ例からもよく分かると思ひます。

次の(表四)に「かなづかひを濫りに變更すると、過去との聯絡が途絶えてしまふといふこと。」とあります。これは(表二)で申上げた「一つの言葉の表記を變へてしまふと、その言葉と密接な關係を有する別の形との聯絡がつかなくなる。」といふことにも關聯します。今までの語例は、主に現在といふ枠の中の言葉同士の横の繋がりを示しましたが、(表四)は縦の繋がり、つまり過去の言葉との繋がりや問題をします。

(表四) かなづかひを濫りに變更すると、過去との聯絡が

途絶えてしまふといふこと。

へ(方・邊)・・・古語では「方向・方角・場所」

の意で名詞。現在でも「ゆくへ(行方)不明」。

くへ(助詞) 「東京へ」「大阪へ」
まへ(前) 「ま(目)＋へ(方角)」
いにしへ(古) 「去(往)にしへ」

「現代かなづかい」では「前」「古」を「まえ」「いにしえ」としてをります。しかしこれらの語の正かなづかひは、表にありますとほり「まへ」「いにしへ」なのです。この「へ」は、現在主に助詞として表のやうに用ゐますが、古語では「方向・方角・場所」(もしくは時間)〔岩波古語辞典〕を意味する名詞でした。「ゆくへ不明」や「まへ」「いにしへ」といつた語の「へ」はさうした名詞の「へ」であります。「まへ」のまは「目」(目のあたりにする)のまに同じ)、その方角だからなるほど「前」です。「いにしへ」は「去(往)ぬ」と「へ」、つまり過ぎ去つた方向(もしくは時間)でまさに過去のことです。「現代かなづかい」は助詞としての「くへ」は用ゐながら、これら名詞としての「へ」はいとも簡単に「え」に換へてしまふ。このやうにして過去の言葉との聯絡通路は断絶してしまふ譯であります。正かなづかひで綴ればそのやうな不自然なことにはなりません。もう一つだけ五十音圖的な例を擧げて終ります。

〔文語〕

いづみ (出)

〔口語〕

でる↑いで (文語「出づ」の活用形、例へば「出でよ!」の「いで」)

この例は、「づ/で」のダ行内對應が明瞭な二つの語の關係が、

いづみ (泉) || 出 (い) づ + 水 (み)

といふ語を「現代かなづかい」で表記する際、

×いづみ

にせねばならないために不明瞭、もしくは類推しにくいものになるのではないかといふことを示すために掲げました。「出づ」「出る」などといふ動詞と「泉」はなんの關係もないと思つてゐると、知らぬ間に表記體系を破壊してしまふ。自然の生態系だけではなく、言葉の生態系も、凡そ有機的なはたらきがあるものは極力尊重せねばならないと思ひます。

以後この講習會は、専らかなづかひの具體的な習得に移りますが、つねに五十音圖の秩序を念頭に置いて學習して頂きたいと思ひます。さうして實際に文章を書き、かなづかひに迷つた際、五十音圖を思ひ浮べれば問題が自づと解決する (場合も多々ある) ことにお氣付きになることでせ

う。

(うへむらともき・NPO法人文字鏡ネット職員・本會參事)

『ほんとうの敬語』 萩野貞樹著 P H P新書

遠藤 浩一

「時代の推移によつて國語も變化するものだ」といふ言ひ回しが、ずつと氣になつてゐる。言葉の變化や亂れを受容したり正當化するとき、言ひ譯のやうに使はれる一言だ。しかし時代が變はつて言葉も變はつたといふ現象を認識すること、それを容認することは全く別である。

時代の變化が外部からの「力」によつてわりやりもたらされたとき、それに應じて言語も變へるべきだといふ主張は、とくにいかがはしい。占領末期の國語審議會は「これまでの敬語は上下關係にたつて發達してきたが、これから敬語は基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならぬ」と建議した。要するに敬語も戦後民主主義化せよとのご託宣である。

しかし、上下關係なくして敬語は成立しないのである。本書の著者・萩野貞樹氏は「(敬語とは)人間のなんらかの意味の上下關係の認識を表現する語彙の體系である」と喝破する。

善しあしや好き嫌いではない。先生と生徒、社長と社員、店と客、首相と官僚、親と子……。人間と人間の關係には、自由民主主義國でも共產主義國でも、社會でも家庭でもほ

とんどの場合「上」と「下」があり(それは「身分」ではなく「關係」である)、その認識を表現する言葉の體系が敬語なのである。

ところが「平等」を金科玉條とする戦後民主主義の世の中にあつては、上下關係そのものが目の敵にされ、「相互尊敬」のもとに敬語を再構築すべしといふ愚論がまかり通つた。自己矛盾以外の何ものでもないが、いまだにそれは強い拘束力を持つてゐる。

本書で簡潔に示される「ハギノ式敬語體系」が他の追隨を許さない明快さ、上位者と下位者の位置關係を基本に、その動作や行動が敬語ではどのように表現されるかを示してゐるからである。戦後の敬語論の大半は上下關係を示す指標を排除してゐるから、敬語を上下關係で理解することができない。崩壊するのも當然である。

敬語の亂れとは秩序の亂れにほかならない。秩序は保守されるものであつて、變化することが當然視されるやうになつたならば、瓦解したも同然である。「言葉といふものはできるだけ變形・腐蝕しないやうに「保守」されなければ役に立たない」と斷言するハギノ式敬語ガイド、眼からうろこが落ちる一冊である。

(産經新聞、平成十七年五月二十二日より)

(ゑんどう かうちち・拓殖大學客員教授)

書評

『国語の底力』 鹽原經央著

谷田貝常夫

石井勳先生が創意と努力をもつて築き上げてこられた
 幼児より始まる石井式漢字教育については、先生御本人の
 著書も多数あり、本『国語國字』誌においても既に昭和
 三十六年（一九六一）に小學校における漢字教育について
 の講演記録があるが、石井式を知らなかつた外部の人間が
 精力を傾けて紹介してゐるのは本著が初めてではなからう
 か。石井式教育を現在實踐してゐる幾つもの幼稚園を訪れ
 ての觀察の結果、著者はかう斷言する。「石井式を取り入
 れなければ、日本は戦後という異様なトンネルから脱出す
 ることができず、無明の道をいつまでもさまよわなくては
 ならなくなるだろう。石井方式こそが国語復活、従つて日
 本の再生の切り札なのである。」

當今の教育界では、ゆとり教育のなかで物の考へられる
 子供を育てるなどと平氣で發言する。物を考へない教育者
 とは是の如きものだ。お上の發言は鵜呑みにし、自分で咀
 嚼、考へ直すこともせずに「ゆとりゆとり」と鸚鵡返して
 事足りりとする。考へるには、考へる材料としての言葉が、

語彙が要る。複雑な現代社會で複雑に思考するには膨大な
 語彙を必要とすること、必然である。石井式はその點、意
 味を持つ漢字を幼い時から無理無く覚えさせる。「仮名は
 単独では意味を伴わないから幼児が覚えるには不適な記号
 なのだ」と著者は再確認する。

戦後の國語改悪問題では文部省ばかりが槍玉に擧げられ
 るが、ジャーナリズムや出版關係者の追従がそれ以上に事
 態を悪化させた。鷗外であれ漱石、小林秀雄であれ原作の
 假名遣、漢字を新假名新漢字にやみくもに直して恬として
 恥ない。そのやうなジャーナリズムの世界に身を置きなが
 らも著者は、新聞用語懇談會などで「交ぜ書き」に猛反對
 をし續けてきた。

私はかつて新聞用語懇談會で「鬱」のよなな字は
 字画が込み入つている分、その字形が極めて特徴的だ
 から、一度覚えたら決して忘れないだろう。字形自體、
 木が繁茂して向うが見えないくらいにふさがつてい
 る。そういう意味さえこの字を見れば分かる。しかも
 『鬱』といふ字は、憂鬱、陰鬱、暗鬱、沈鬱、躁鬱、鬱蒼、
 鬱積、鬱憤、鬱然、鬱屈、鬱血、鬱病、鬱々、鬱勃、
 鬱陶しい……、利用範圍のきわめて広い漢字なので、
 これを『憂うつ』だの『うつ病』などと交ぜ書きする
 のはまことよろしくない」と、正しい漢字で表記す

るように主張したが、漢字制限派に「鬱」は難しすぎると一蹴されてしまったことがある。

石井理論をそのときもつと勉強してゐればもう少し説得力のある反対論で理解者が得られたかもしれないと筆者は悔んでゐる。假名先行による交ぜ書きが、意味の學習には妨げとなることは石井先生が疾うに氣づかれてゐたことなのだ。

本書は、石井勳先生の人生、業績を事細かに跡附けた上で、これは英才教育といつた技術ではなく教育思想なのだと見極める。そして人を顯彰しながら、著者自身の言語觀をも語つてゐる。「言葉もまた生命と一緒である。先人からの預かり物なのだから、これもやはり子孫へ繼承してゆく必要がある。」「己」は悠久の歴史の一員とする考へは、石井勳先生の思想と共鳴するものである。

平成十七年十一月十九日於日本俱樂部
第七十六回國語問題講演會

第七回假名遣腕試し（問題と解答）

解答者氏名

年齢

次の傍線の語の讀を歴史的假名遣で下の括弧内に書いて下さい。送り假名は省いてあります。

例、戀患（こひわづらひ）、ズラリ（づらり）

- 一、上總（ ）、上野國（ ）
- 二、康治（112～114）（ ）、弘治（1555～1558）（ ）
- 三、貞元（976～978）（ ）、承元（1207～1211）（ ）
- 四、正和（1312～1317）（ ）、昭和（1926～1989）（ ）
- 五、天智天皇（ ）（御名は中大兄皇子）（ ）
- 六、初詣（ ）（の客で賑）（ ）を見せる
- 七、まさか疑ワレヨウトワ（ ）
- 八、杖サエ（ ）（突けば十分）（ ）（ ）（ ）歩ける

九、陣中見舞 () に訪レル ()

十、鍬形蟲 ()、轡蟲 ()

蛆蟲 ()

(解答)

一、上總 (かづき)、上野國 (かうづけのくに)

イ「上總は「かみつふさ」から下總 (しもふさ)、安房 (あは) と共に房総半島。

ロ「上野は「上毛野 (かみつけの)」から、現代假名遣で「こうすけ」では由来

が分らない、辛うじて「下野 (しもつけ)」が「下毛野 (しもつけの)」か

ら來ることより類推。

二、康治 (1142 ~ 1144) (かうぢ)、弘治 (1535 ~ 1541) (こうぢ)

三、貞元 (976 ~ 978) (ちやうげん)、承元 (1307 ~ 1311) (じやうげん)

ようげん)

イ「ジヨウ・チヨウ」同字に「テイ」の聲あれば「ぢやう・ちやう」(定

貞・丁・提・停・挺・頂)

ロ「元」は從來「けん」、「くわん」。最近は整合性を考ふれば「くゑん」なる

べしとの説有力

四、正和 (1312 ~ 1317) (しやうわ)、昭和 (1926 ~ 1989) (せうわ)

イ上記三問に示すごとく本朝の元號には聲同じくするも假名遣同じきはなし

五、天智天皇 (てんぢてんわう) 御名は中大兄皇子 (なか

のおほえのわうじ)

イ「智」は吳音強音ともテ、現代假名遣では「智」の語意識の有無から「てん

じ」、「てんぢ」とも

ロ「兄」は「え」、弟は「と」、千支は「えと」

六、初詣 (はつまうで) の客で賑 (にぎはひ) を見せる

イ「詣」は「まるご」(夕行下二段)の連用形、語幹がウ音便に。

七、まさか疑ワレヨウトワ (うたがはれようとは)

思ウテモイナカッタ (おもうてもゐなかつた)

イ「やう」は連用形に、「う」「よう」は未然形に接続、「れる」は未然連用同

型なので、受身形でない、同様の意味構造の言ひ方に置換へて判別する。

この問題では「疑はうとは思はない」(未然)、「疑ひやうもない」(連用

となるので、受身形も「疑はれようとは」(未然)、「疑はれやうもない」(連用

ロ「思うて」は「思ひて」のウ音便、通常は「思つて」と促音便、「思ふて」

と誤るのは戦前の著作にも散見される

八、杖サエ (つゑさへ) 突けば十分 (じふぶん) 歩ける

イ「十分」は「充分」の表記もあるがこれは「じゆうぶん」と假名遣が分れる

九、陣中見舞 (ちんちうみまひ) に訪レル (おとづれる)

イ「中」の字音假名遣は從來「ちゆう」、「ちう」とすべしとの學説有力

十、鍬形蟲 (くはがたむし)、轡蟲 (くつわむし)、蛆蟲 (う

じむし)

イ「鍬、轡」は共に「くは」、「轡、器」は「くつわ、うつは」、「蛆」氏は「う

じ、うち

寄附者名簿

平成十七年度（順不同）

《協議會發行の本・DVD》

柏原保久、石川泰三、松岡隆範、太田絢子、山本直人、佐

藤敏次、岩田榮二、留守晴夫氏、高崎一郎、中村一仁、飯

塚信友、森田力、新井寛、渡邊晃、大谷眞智子、岩下明、

伊勢神宮宇治土公貞幹、柳田淳、後藤英岐、仁平一哉、池

内力、山本俊一、青木慶次、濱田宏昭、對馬仁、谷利也、

田中樞子、出口確、大口道雄、都田潔、中嶋俊彦、關根瑛

應、滝沢幸助、佐藤利幸、西島壽賀子、鈴木亮、小川玉泉、

守千代海、谷田貝常夫、苦名康、古家時雄、渡邊建、萩野

貞樹

『平成疑問假名遣』高崎一郎著 發賣所 紀伊國屋書店

電話 〇三・五四六九・五九一八

『國語國字 通卷DVD』第一號（昭和三十五年）より第

百八十五號（平成十七年）まで

發賣 横濱五十番 email: zenpon@literature.jp

編輯後記

何年も前から刊行のための作業を進めてゐた『國語問題協議會四十五年史』が漸く上梓され、會員の方々にお送りすると共に、全國の公共圖書館、大學の圖書館、神社等約三百の受入先に獻本しました。前回の『十五年史』は刊行が昭和五十年で、「國語問題協議會の歩み」は昭和四十九年に終つてゐます。今回はそれ以後の三十年間が追加され、平成十六年までとなりました。

會報の『國語國字・總目次』もそれにつれて百號分追加されて百八十五號までとなつてゐます。この『國語國字』に關しては、事務局保存版に既にかんりの缺番がはじまつてゐたので、何とか全號を記録として残さうと計畫してをりました。漸くに「DVD」一枚に収める作業が完了し、横濱五十番館より發賣をはじめました。講演者、演題、各號内容、などの索引がまことに便利に使へます。折角のDVDですので、宇野精一先生の講話動画像を三十分ほど入れました。

また、「本會刊行圖書・推薦圖書一覽／解説」も十五年史の「本會著作、推薦圖書紹介」から大幅に擴充されてゐますし、過去の講演會のすべてにわたる講演の「摘録」（抜萃）も掲載しました。萩野貞樹常任理事の努力によるもの

です。

表紙の題字は會員の書家、平勢忠夫氏によるもの、また表紙繪は松岡隆範常任理事によるものです。

昨年一月に出版された『國語問題論争史』は、昭和三十七年に刊行された同名の書（福田恆存著）の再刊であると共に、同年以降の國語に關する諸問題を土屋道雄氏（本會の元主事、現在の名譽會員）がとり擧げたものです。その本にも洩れた幾つかの問題について書いていただいたのが、本號の『國語問題論争史』の出版に際して」です。

前の版については、福田恆存未亡人の許諾を得て何年も前から本協議會のホームページに順次載せてきましたが、最近本文に關しては一通り上架を終つてゐます。札幌の佐藤進氏の助力によるもので、「今後の問題」及び「後書」も遠からず公開します。

事務局長 谷田貝常夫

關聯電網

國語問題協議會

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~kokugoky/>

國語問題協議會傳言板

<http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/>

文語の苑

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/>

文字鏡研究會

<http://www.mojikyo.org/>

(有)申申閣 (「契沖」) <http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>

橫濱五十番館

<http://www.literature.jp/>

平成疑問かなづかひ (高崎一郎)

<http://homepage3.nifty.com/gimon/>

日本漢字教育振興協會

<http://www.kanji-kyoiku.com/>

石井式國語教育研究會

<http://www.isisiki.co.jp/>

ウェブ冊

<http://www.shigarami.net/>

岡田俊之輔の頁

<http://homepage3.nifty.com/okadash/>

高池法律事務所

<http://www.takaika.com/>

現代國語への處方箋 (蓮沼利夫)

http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/

文學の救ひ - 福田恆存論 (前田嘉則)

<http://logos.blogzine.jp/1/>

平成十八年八月三十一日發行（第百八十六號）
創刊昭和三十五年十二月一日（通卷百八十六號）

編輯・發行 國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六
郵便番號 一四六・〇〇八五
電話 〇八〇・三四一一・五五〇一
ファックス 〇五〇・三五八八・六七二五
電 郵 kokugokyo@nic.biglobe.ne.jp
URL: <http://www5b.biglobe.ne.jp/~kokugoky/>